

古史傳

自第四十段
至第四十七段

九

| | | | | |
|---|---|---|----|-----|
| | | | | 和書門 |
| 二 | 九 | 六 | 二〇 | |
| 二 | 九 | 三 | 一 | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | 類 |

| | | | | |
|-----|---|------|---|-----|
| 庫 | 文 | 閣 | 內 | |
| 一四〇 | | 二〇二六 | | 和書類 |
| 函 | 一 | 一 | | |
| 十 | 冊 | 號 | | |
| 架 | | | | |

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 20261 |
| 冊數 | 22 (9) |
| 函號 | 140 183 |



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



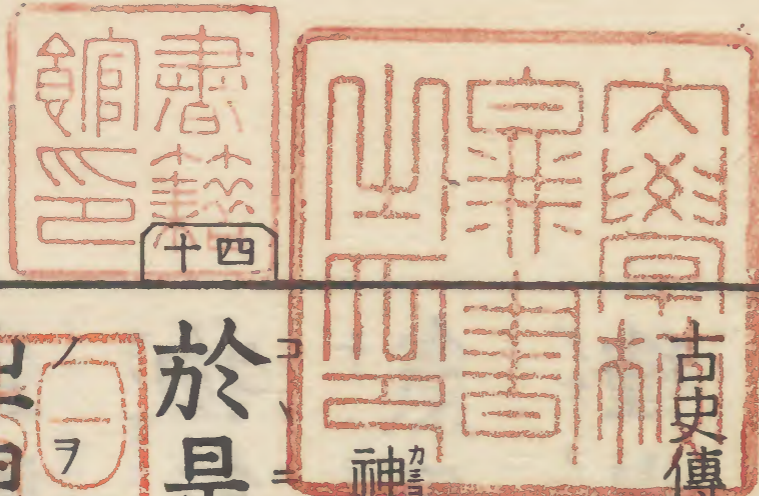
© Kodak, 2007 TMI-Kodak



於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此
於是天降大神於此

天降大神於此

天降大神於此



古史傳九出卷

神代中一出卷

平篤胤謹撰

淺草文庫

男 鐵胤

續攷

孫 延胤

於是天照大御神詔神速須佐

出男命曰於葦原中囿聞有宇

氣母智神云者宜爾就候詔矣

故速須佐出男命受勅而天降
坐而到宇氣母智神出許而食
物乞給其宇氣母智神矣爾宇
氣母智神自鼻口及尻取出種
種出味物而於百取出机種種

作具而奉饗出時速須佐出男
命立伺其態而為奉進穢物而
忿然作色詔曰穢哉鄙哉寧以
穢物養吾乎詔而迺拔劔擊殺
其宇氣母智神而復命而具言

ソノコトヲトキニ。アマテラスオホミ。カミイタクミイカリマシ
其事出時。天照大御神。甚怒坐

而。汝者惡神也。不須相見詔而。
テ。イミレハ。アレキカミナリ。ズトホリセ。アヒミマクノリタマヒテ

乃一日一夜隔離而住矣。
スナチヒトヒ。ヒトヨヘダチサカリテ。マシマシキ

葦原中囿ハ。天上ふて。此囿の事を云時ふいふ言あす。委

く在下。第六段。よ云を見るはし。○宇氣母智神也。豐宇氣毘

賣神の亦名ふして。食物此神ふ坐あと。上。第三段。ふ云るグ

如し。ちて此神也。その生坐る時とす。此布ぞまで。此囿ふ

住居ませ依を。其地は何所ありぬ。攝津國風土記云。稻

賣神居山中。以盛飯。因以為名。といひ。また昔。豐宇可乃賣

神常居稻椋山。而為膳厨之處。あどあるを。由ある。う。ま。と

山城名勝志。よ。桂里の故事を記して。或云。月詠等。受天照

大神勅降。于豐葦原中囿。到于保食神許時。有一湯津桂樹

月詠等。乃倚其樹立之。其樹所有。今号桂里。と云。此說風

土記の傳ふやと思へる。あれもし実あらむ。山城國。■

郡あり。○宜爾就候。大御神のちうす無げふ。かく詔ひ出

給子依事也。幽き所由ある。とれらるはし。○受勅而也。於

保美許登加斯古美氏と訓む。万葉あどふ多き詞あす。○

鼻和名抄ふ。鼻和名波奈。○尻同書ふ。尻和名之利とあり。

如此く訓べし。師云。尻を古書み。凡て加久。訓と訓るを。之

り。そを皇の大前ふして。書紀あぞを讀奉る時。忌はし。或

を漏してとまび。あど有し例あり。信ふはる時こそ然あるべけれ。本ふさる。其訓を付むことと。いひあり。之理てふ言も。古を扱く。おで。何まと言き。尻。字。久米。繩。おど。其餘。み。お。之。理。と。云。ひ。用。ひ。ぬ。れ。バ。異。さ。ま。の。訓。れ。る。ら。び。○味物。師云。多米。都母。能。と。訓。べ。し。應。神。卷。此。末。み。あるも。如此。其故。ハ。貞觀儀式。大嘗祭。儀。ふ。辨。大夫。入。自。儀。を。む。べ。し。其故。ハ。貞觀儀式。大嘗祭。儀。ふ。辨。大夫。入。自。儀。主基。兩。少。有。て。其。詞。ふ。御。酒。倉。代。缶。物。多米。都。物。雜。菓子。飯。國。を。云。少。有。て。其。詞。ふ。御。酒。倉。代。缶。物。多米。都。物。雜。菓子。飯。あど。此。色。目。見。え。ま。と。大。多。米。津。酒。大。多。米。酒。波。多。米。御。酒。多。每。米。大。多。米。院。あ。ど。見。え。延。喜。式。ふ。も。多。明。米。多。明。酒。多。明。酒。屋。多。明。料。理。屋。れ。ど。見。え。ぬ。れ。ぞ。れ。也。但。如。此。く。大。のみ。多。く。出。て。他。よ。ハ。一。も。見。と。祢。バ。彼。祭。よ。供。古。ふ。凡。て。神。物。み。限。れ。る。名。目。う。と。め。聞。ゆ。れ。ど。さ。ふ。非。更。古。ふ。凡。て。

美味。飲食。を。云。る。名。れ。也。凡。て。上。代。の。事。也。物。名。も。何。も。神。も。ぬ。る。く。大。嘗。ふ。姓。氏。録。多。米。連。條。ふ。成。務。天。皇。御。世。仕。のみ。此。よ。ま。る。あり。姓。氏。録。多。米。連。條。ふ。成。務。天。皇。御。世。仕。奉。炊。職。賜。多。米。連。也。ま。と。多。米。宿。禰。條。よ。成。務。天。皇。御。世。仕。奉。大。炊。寮。御。飯。香。美。特。賜。嘉。名。と。あ。る。を。以。て。知。ば。し。供。神。限。ら。ざ。る。お。と。此。り。て。明。き。し。第。百。四。○種。く。は。上。あ。る。は。十八。段。の。甜。酒。も。多。米。邪。邪。と。訓。べ。し。○種。く。は。上。あ。る。は。取出。る。物。の。品。下。れ。る。は。其。を。御。饌。物。ふ。作。め。調。と。依。品。の。多。祀。を。云。也。陰。陽。寮。式。難。祭。文。み。海。○作。具。を。師。云。都。久。理。曾。那。閉。と。訓。べ。し。内。宮。儀。式。ふ。種。く。味。物。儲。備。仕。奉。祈。年。祭。祝。詞。ふ。種。く。色。物。乎。備。奉。氏。あ。ど。見。也。曾。那。布。と。は。不。足。あ。ぞ。れ。く。齊。牙。る。を。云。俗。言。よ。神。ふ。物。供。る。を。曾。那。布。○立。留。と。云。も。備。具。て。供。る。意。あり。○立。

伺とは。隠立て。物の隙おどとて窺ひ觀多るふれ也。○擊殺ハ。撃て殺し給ふとふは非也。撃ハ加ろく添とる辭ふて。實を斬殺し給ふれ也。拔劍とある。扱如此荒ぶ依御所爲の有しは。其荒御魂と坐に禍津日神の屬坐まはれ依てれ也。其下ふ。帥其子五十猛神而降坐とあるを思ふべし。されど其上坐る時の状も。此も。さ依状も見えぬ也。御身を合せて。其由を上よ云る如く。禍津日神ハ。伊邪那岐大神の穢とし死事を惡み給ふ御靈ふ依て。生坐る神ふ坐はぐ故ふ。いゑく汚穢とを惡給ふを。宇氣母智神の。口まと尻おどとて出しとる物を。奉進らまふ依て。其を怒て坐に御心のみまきみ。それやぐて。宇氣

母智神此神徳ありとを所思看さばて。其御心の進むまふく。擊殺し給へる也。此ぞ荒御魂の姿。然れども。此神を殺し給ふは。種く穀物おど此成出たる也。即荒御魂の徳用ふを有れぬ。○甚怒坐而畏れれど。大御神此。此時かく甚く怒坐る。大御心の不ぞを窺ひ奉るふ。初免須佐之男命ふ勅して。宇氣母智神字候せ給ふ。依て。彼神の宇氣の神徳此大死に坐まはれと我の祢て聞看し坐ましは依故。ゆるしく所思し坐て。其有宇氣母智神云者と詔へる。その功德の不ぞをいうあらむ。候て來給ふと此御心よて。も此し給へるありぬむを果し

て大御神此。所聞看しおき給子如く。神徳の坐くける
ふ。須佐之男命の撃殺するへるを。白ふるふよ依てぞ。
彼ネモロ懇フシみ惜み所思看に御心とて。かくを御怒に坐るれは
ばし。信ふうべある大○一日一夜隔離ヘチサカリテ而住ミレクキ矣。此文マま
お論ふばきまといゆ。抑天上を。彼清明スミアカうる物の萌上り
て成まは御国おまを。元とて常書トコヒレあるべき上り。大御神
此御光の照徹テリトホに坐せれを。夜を有るはくも所思オホエさるふ。
此よかく有るを心得交。もしくは天上よも。本とゆ書夜
此有て。大御神の御光も。国土よ書夜の有る如く。休り給
ふ時トキも有ふや。天学よ委き或人此説よ。照日の日くふ異
あく照るとを見せれど。常お心を扱けて

同へて。雲を蔽カサてざれど。自然よ照スのおよあく劣セちて。因
る事ありと云り。ちまぞ此故ふを非じとぞ思ふ。ちて。因
土此書夜をれ出イせハ。轉旋ウツリクマて。天日ツふ對ふと反ソムくとの
故うはほまど。其を天よ書夜の有る因よ依て。国土もそ
まよ従ひて。書夜の定サに出来ははふや。と思ひしうど。
お不熟ヨク思シや。此を此時此御怒の太イミかめしを云子ぞ
も。其はあぐ。一日一夜むりて。此間ホドを。御面を合せ給を交。
離サカリて住ミして。まで此事ふて。やがて御怒の休み給子に
との事を。此国土の書夜よ準ナラへる。語傳コトツタとる文ふぞ有る
流。其を下ふを。猶甚しき御荒びの。有るをさすよ。見直し
聞直し給ふ。廣き厚ま御惠此趣を見て。想像り奉るべあ。
然まバ此一日一夜を。天よ書夜の有る此謂イハふハ非交

凡此。書紀子取とまへる本書ヲ其趣のよく聞えと正
文を改むとて、かく紛
らハしく成ふ也

故是後天照大御神復遣天熊

出大人而看出時宇氣母智神

實己死矣故其所殺出神身生

物者於顱上生粟於眉上生蠶

與桑木於目生稗於腹生稻種

於衾生麥及大豆小豆頂化爲

牛馬矣故天熊出大人悉取持

而奉獻出時天照大御神喜出

詔曰是物者宇都志枳青人草

ノクロテベキイクモノゾトノリタマヒテスナハチヲアハ
出。食而可活物也。詔而乃以粟

稗麥豆爲陸田種子。以稻爲水

田種子。又定天邑君。卽以其稻

種。始而令殖天狹田及長田。則

其秋垂穎八握。莫莫然甚快實

矣。又於天香山殖桑木而養蠶。

其蠶含口而抽絲。養蠶絁織出

業。自此時始有矣。

天熊之大人。此神名他書所見。とるあといふ。或人武三

と。一神あらむと言ふれど。然も非じ。かく依時の御使

事あど由有げあり。○看之時。おる宇氣母智神。此殺さえ

給へ味を甚く惜み多るふ餘りふ。須佐之男命此殺し給
する由は白し給へども。もし生居イキヤとるふ事の何らむうと。
猶ナカやうしく所思看ての御使あす。宇氣母智神實已死ニキ矣。
と何るふ心を想像オモヒヤす奉るべし。○牛
馬。馬を扶桑略記。昌泰四年七月二日。左馬寮乾角坐ニ從五
位下生馬神被加ニ一階ヲ。日本紀畧名勝志ニも。延喜元年七月一日。加
左馬寮坐生馬神位一級。依御馬苦動甚也キ。まニと諸社根元
月十五日從五位下。坐右馬寮保馬神ニ。位階を加へ給する由も見也。○顛ニを類聚名義抄小
ヒタヒニ也見也。和名抄ハハ加之良乃加波良ニと有れど。○
眉和名抄ハ。說文云。眉ニ。目上毛也ト何也。○蠶和名抄
萬由。

小。說文蠶虫吐絲者也。和名繭蠶衣也。萬由。と見也。まニ和
古とも有れど。蚕ニを唯み古と云ぞ。本言ある。加比古ハ養蚕の意あす。○桑和名抄ハ久波蠶
所食也ト何也。○稻種穀物五品の中み。此のみ種と云へ
るはハいふを云ふ。師の言れおる如く。此ハ生れるは。六
品おのら其實あす。然るも餘ホカの五品を種と云。祿ニど自
から實のおと胤ニ依を。稻を伊禰イネと比み云ては。穂ホみ在時
此名ふして。實ニを聞えび。莖キあがら生オヒある如く聞えて。
紛マギらはしきればあす。此ハ多以ても古言のお布ざす。○粟
稗。麥。大豆。小豆。和名抄ハ粟。和名阿波稗。新撰字鏡ハ比江
と見え。麥和名牟岐。大豆和名萬米。小豆和名阿加安豆木。

師云、あいはとぐ阿豆、伎あるを、黄小豆、緑小豆、あど云、漢名あるふ就て、後よ色を分、云ふ名なり。○右十品の中ふ、八品をみあ其、所くふ生を依を、牛馬の二品を直みそ、此頂の化れゆと有、あと。所由、何るべし。師云、是、等を書紀の註どもふ、如此身躰、生、生、云、云、仮の言ふして、実、其物、く、宜、き、土、地、殖、あ、ま、あ、と、説、あ、せ、る、を、み、れ、例、此、あ、ま、さ、の、し、丸、推、量、の、私、事、ふ、て、い、え、く、古、傳、の、意、あ、そ、む、け、ま、と、生、る、物、と、其、処、と、を、合、せ、て、然、る、由、を、云、る、も、眉、小、蚕、の、生、る、を、云、る、外、を、皆、あ、と、ら、び、強、言、あ、り、凡、て、何、○是、物、者、ご、と、も、強、て、い、ろ、バ、如、何、さ、ま、あ、る、も、云、る、物、ぞ。宇都志、枳、青、人、草、之、食、而、可、活、物、也。詔、而、あ、の、大、詔、詞、を、熟、思、ひ、て、大、御、神、の、人、草、を、愛、く、所、思、看、び、大、御、心、此、不、ど、を、伺、奉、る、べ、し。此、上第二十九段御頭、珠、を、賜、ふ、処、ふ、云、る、如、く、や、ぐ、て、伊、邪、那、岐、大、神、の、青、人、草、を、愛、み、ま、ま、御、心、を、大、御、心、と、爲、給、

ふ、よ、て、言、以、て、也、ま、む、二、柱、産、靈、大、神、の、此、固、を、修、固、成、せ、と、依、給、へ、る、大、詔、命、ふ、本、お、く、事、ふ、あ、む、有、る、御、紀、宣、化、天、皇、元、年、五、月、の、詔、曰、食、者、天、下、之、本、也、黄、金、萬、貫、不、可、療、飢、白、玉、千、箱、何、能、救、冷、云、く、安、固、之、方、更、無、過、此、と、何、也、あ、れ、を、と、有、難、き、勅、語、あ、り、し。熟、思、ふ、べ、し、深、考、考、べ、し。○陸、田、種、子、を、波、多、都、母、能、と、訓、べ、し。○水、田、種、子、ハ、多、那、都、母、能、と、訓、べ、し。○右、種、く、の、穀、此、中、ふ、稻、を、田、お、も、の、と、定、給、ろ、る、あ、や、は、此、種、此、腹、小、生、を、依、を、思、ふ、よ、主、と、あ、る、物、あ、依、所、由、あ、る、べ、し。○天、邑、君、天、上、あ、る、邑、君、あ、て、此、を、田、畠、を、作、る、長、を、云、あ、る、べ、し。○天、狭、田、長、田、此、を、天、上、ふ、在、る、大、御、神、の、

御營田ニツクダの名あり。狹を長と對カひて。字の意此言あらむと
所思れど然らば。此は眞マコトに通ふ佐サふて。稱言タテマツあり。餘ノ布フ此
書紀フ大御神の御田ヲ。天垣田。天安田。○莫く然師シ比斯
天平田。天邑井田。おど云名見えたり。○那比斯牙理ナヒシヤリ氏と訓れ多依ヨて有べし。○甚快實矣は。
本亦甚快也。や何るを。師の伊登余久美能理伎イトヨクミノリキと訓まよ
依ヨり依ヨて文を成し扱サ。さて此時より始ハて田殖ノ事ハ起
るを思シ。○天香山アメノカガヤマは。火之迦具土神の御體ミタマ此成まる山あ
る故ユ。かく名ナ負オヘるおと。上ウヘ。第十ジウ段。ふ云イハす。けて此山ノ桑ノ
木を殖ウヅて蠶コを養カヒと依ヨる。深き由ユ何るおとあるべし。其ミを
言イハは。此虫のいとク奇オドロク異ヘき蟲ムシあることと。今更イマ云イハす
までもモあく。そが中ナカみ穢ケガレを惡ウラむことトの。まぐれて奇オドロクうウる

小就コて按アず。下の岩屋戸段ノ種タネの物をみお香山より
取トれることと。穢ケガレを清スむる由ユあるべきこと。彼カ処トコロみ云イハす
養カヒ立タとまはむと。此御量ミタマふぞ有アり。○其ミ蠶コ含ミ口クハ而シテ
抽ヒキ絲イトハ。蠶コ和名萬由マンユと何ナニり。けて此を口クハふ含ミみて絲イトを抽ヒキ
げるは。今も爲スる事コトあハりや問タぬべし。○維織ヒタオリ之業ノ自ヨリ此時ノ
始ハ有アり。おの維織ヒタオリ此事ノを始ハするは。上ウヘある。天萬テンマン栲幡コトフタ千幡チフタ
比賣命ヒメノミコトあるべきおと。言イハまでも非ヒな。其ミ下シタふ次ツギく言イハふ
を見て辨ワカべし。或人問ナニト。是時ノを田殖ノの事コトまよ維織ノ事コト
時始ハて。食物之道ノ始ハまりと云イハす。心得ココロがぬし。さ依ヨり此ノ事コト
とちノ御衣ミカサ服ノを食クて。又大御神ノ此御装束ノの事コトあハり。伊那那岐
命ノの御衣ミカサ服ノの事コト又マタ大御神ノ此御装束ノの事コトあハり。伊那那岐
れバ。是ノ答コタヘ。そは早く天地ノ初發ノの時トキを。此事ノ無クて。い
いハまシ。古コ意イを得エるものぞ。然シカるは世ノ初發ノの神ノくト。

何も世子異ある神徳の坐ませば食物を看とりや看さ
びやいのふ有けむ知べうらまよと衣服のみあらば凡
ての調度も皆其御量み成具るして闕ることれく其を
何を以ていふ際ふ非た其を此の大御神の始給へる事
て量知べき際ふ思ふべし其を此の大御神の始給へる事
云ハ此を以て思ふべし其を此の大御神の始給へる事
命の宇氣母智神を殺し給へるより事起れるを元たり
如、此の神靈に因る由に備れ依事あるべくそれとは産
靈神の後世に凡心を以て世を初給する神の御上を准
へ思ふぞ狭き漢意に於て世の初給する神の御上を准
神の右に種々を見行して此物等も顯見青人草の食て
活べき物ぞと詔へる大詔命の意を熟思ひてこれ幽く
妙ある理を けて右の種々を取し免て種と爲し給へる
辨ふはし 事を古事記ふ也。神皇産靈御祖命と傳へぬまを。此を
およ取れる書紀に傳の勝れるおぞ。下の件々ふ見えと

る事實を察て辨ふはし。但し書紀にハ大御神とし古事
ことと少う由ありげある事ども思ひ けて上件速須
得ある事も何れも容易くハ言ぐとし けて上件速須
佐之男命の御所爲ふ依て。荒御魂の徳用を察。この件に
大御神に御量み依て。和御魂に徳用を察奉るはし。其在
云る如く此二柱して伊邪那岐伊邪那美命の御功を
給ひて其御功を果し給ふ所由の何れむあり然るをそ
れとあらはあらば何れも成具ふぞ神の御所爲ふ有る依
の因よ其事ども成具ふぞ神の御所爲ふ有る依

於、ニハヤスサノヲノニコト
於是速須佐出男命。

亦名勝白
速日命。

天照大御神曰我心清明出故。

アガウメリシミコエタリヒコミコヲヨリコレニテマヲサ
我所生出子得男子。因此而言
則自我勝云而於勝佐備荒健
バオノツカラアレカチヌトイヒテニカチサビアラビタケロ
而春則毀其御營田出畔溝埋
テハルハハナチソノミツクダノアラミゾウメ
槌放頻蒔秋則穀物已成出時
ヒハナチシキマキシアキハタナツモノノステニナレルトキニ
亘以絡繩馬伏串刺矣。亦天照
ヒキワタシアセナハヲウマフセクシサシキマタアマテラス

オホニカミノキコレメスニヒナヘトキニソノニヒ
大御神出聞看新嘗出時其新
ミヤノミムレロノシタニヒソカニクツマリキラシキ
宮出御席出下陰屎麻理散矣
アマテラスオホニカミズシロシメサテタビニマシソノ
天照大御神不知看而徑坐其
ミマシノウヘニキヨリテコレニオホニマニナヤクサミタマフ
席出上矣。由是御體舉不平焉
カレドモシカスレアマテラスオホニカミハモテミウツク
故雖然爲天照大御神者以恩

親出意不咎給。不恨給。容出而
詔曰。如尿者。醉而吐散。登許曾。
我那勢命如此爲歟。又毀田畔。
溝埋者地矣。惜登許曾。我那勢
命如此爲歟。雖詔直給。仍其惡

態不止而轉焉。

言則麻袁佐婆と訓べし。今世人の語ふも如此る所ふ。如
此言とあて。○自は師云即と云ふ近し。上文も自吾
子也乃汝子也と同意の言をかく乃とも云ふ。共ふも
と云ふと云むが如し。下文も天原自聞まよ自照。○於勝佐
備師曰。懸居大人説ふ進むことを須佐備と云ふ。まよそ
約て佐備とも云ふ。須佐を反て佐ぬり。今此神宇氣比ふ勝給へ
御心の進免る勢ふ荒び給ふを。勝佐備と云て。進荒ぶる
意を云と何。又云万葉一よ。感傷近江舊都。哥よ。樂浪乃

もこれも。因御神の心はぎびて。因の乱を起し。都を荒せ
ゆと免るあり。今云此。哥旧説どもハ誤ま。不此佐
備。須佐備てふ言。是と。種く。轉し。用ふる。けり。須佐之
こと。あど。委曲。万葉考。書され。けり。後世。物の
男。申。御名も。此意。あり。故。旧。進。雄。と。り。後。世。物。の
進。み。荒。き。を。須。佐。夫。と。云。ふ。と。多。し。○。營。田。は。師。云。都。久
陀。と。訓。べ。し。下。第。百。五。十。六。段。ふ。作。高。田。則。可。營。作。澹。田。あ。ど。見。也。
孝。德。天。皇。紀。よ。和。名。抄。よ。佃。豆。久。太。と。何。也。○。畔。を。記。ふ。阿
營。田。と。何。り。和。名。抄。よ。佃。豆。久。太。と。何。也。○。畔。を。記。ふ。阿
少。書。り。師。云。和。名。抄。よ。ハ。畔。田。界。也。和。名。久。呂。阿。世。と。何。也。
ども。古。は。阿。と。此。み。云。也。阿。世。は。も。と。畔。躬。恒。集。ふ。お。の。免
は。る。時。り。あ。る。ま。で。苗。代。の。あ。を。免。ふ。い。る。ど。お。く。ら。げ。也
也。○。毀。ハ。波。那。都。と。訓。べ。し。本。書。り。毀。此。云。○。溝。埋。埋。を
波。那。豆。と。何。也。

宇豆米とも訓べられど。古語拾遺。美曾。宇女。を。何。る。ふ。依。て。宇。米。と
訓。べ。し。師。云。和。名。抄。よ。釋。名。云。田。間。之。水。曰。溝。和。名。三。曾。也
何。也。け。り。畔。を。離。れ。其。田。り。免。く。は。子。と。る。水。を。涸。し。ま。と
水。の。多。う。依。時。は。外。と。漫。り。入。て。溢。さ。む。爲。此。態。あり。田
を。混。さ。む。此。爲。あり。と。云。ふ。は。非。也。お。の。種。の。惡。行。ど。も。界
残。春。と。秋。と。よ。分。て。云。る。中。よ。此。を。春。此。事。と。何。る。も。水。此
免。れ。あり。溝。を。埋。依。れ。水。を。引。け。る。を。妨。げ。む。と。免。也。○
樋。放。ハ。師。説。ふ。溝。よ。ま。れ。池。ふ。ま。ま。構。へ。て。常。ふ。を。板。も。て
塞。て。水。を。畜。へ。置。て。其。水。を。田。よ。引。用。ふ。べ。き。時。よ。の。板
此。せ。き。を。ば。放。お。事。あ。る。ふ。水。の。用。あ。き。時。ふ。を。外。ち。泄。し
て。田。よ。水。を。溢。れ。た。め。且。用。何。る。時。の。免。く。ハ。へ。を。失。ハ。志

むるあり。とあり。○頻レキマキ蒔キ。古語拾遺古語志。重播古語志。とあり。依レまレゆ。門人竹内高庭レキ云。頻ハ重レあり。神代紀レ。此を重播種子と書ル意あり。稻種を一度播置トる上へ。又重レ祓テ播バ。苗籠コモ生ヒて。莖クキどち宜レあらバ。甚イタく妨ナとあり。凡ソ。按フ。東寺モテ所藏ル。應德二年五月。東寺領伊勢国大圀庄。庄司僧圓順ノ。解狀ノ。權禰宜延能ノ。妨行を停止トむ事を申請ス。ふ文ノ云。他人耕作下種ス後。以四月廿八日。反播殖期ノ。另ノ。別字ノ。古作。庄田重押ト時ト。年來。庄田四町七反ノ。籠作コモツクリ不レ致ス。辨ハ。恣ニ。振ヒ。行フ。不レ善ニ。不安ニ。云。右件禰宜籠作コモツクリ庄田。毎年。官物致未進ス云。耕作違期之刻。下種ス之上。重押ト時ト。種致妨ナ爲レ停ト。

止言上如件ト云。とあり。其頃ノ。亦。重播種子ノ。惡行トとシる者ノ。何レ也ト。あり。籠作コモツクリと重レ蒔キして。苗コモ籠コモ生ヒ蒸ムれ枯レ。あどレ。あるを云へり。を聞ク也。此事物ノ。見エとル。グ希メツらしキ。まレ。書キ出スとあり。と云へり。○巨ヒキワタシ以テ絡アセ繩ナハ。あレ。いウ。ふレ。爲レ給ヘる事ヲ。思ヒ得ズ。まレ。ぞレ。猥ミダ也ト。引キ。巨ヒキして。妨サマげを爲ス給フことあり。べし。○馬ウマ伏フセ也。次ニ見ル也。服屋ハタヤの棟ムネを穿チて。斑駒フナゴマを墮オト入レ給ヘるあどを思フふ。稻コメ此ノ。よく實ミ生ノれる時ニ。馬ウマあど引キ入レ伏フサ。あめて。害ソコナひ給ヘるを云フあり。ばし。○串刺ハ。神代紀ノ。素戔スサ。烏尊ウズノ之田ノ。亦モ有ル。三處ミカド號ナ曰ク。天アメノ。織オリ。田タ。天川カハ。依ヨ。田タ。天口ノクチ。銳ト。田タ。此レ皆ハ。磽地ヤセトヨリ。雨則流ル之ノ。旱則焦ヤケ之ノ。とあり。

也。穢も串も同じりまむ。加の天、穢田と云へるハ、田の泥
中、穢ありて、下立ち難うゆらむ。其田の如くみせむと
て、大御神の御田、ふ杭串おどを刺て、田人、足字害ハせ。
たりに立せじと、妨げ給ひし、仇誼べし。紀の一書、よむ挿、籤
と何也。扱今の世、よも恨ある人の田、ふ木竹、け切くひを
埋みて、妨をおひ事、おく有、あとお正とぞ。○新嘗ハ、師
説ふ。爾比、那閉と訓べし。雄畧、卷の姦、哥、ま、と 那閉之、
饗の約、正とる、ぬゆ。ま、と、阿、と、那、と、通、ハ、し、云、例、多、け、新、稻、
を以て饗、ぬるを云、名あり。と何也。お、不、那、閉、み、嘗、字、を、書、
大、嘗、を、大、嘗、と、云、ひ、毎、年、の、を、新、嘗、と、分、て、云、ふ、お、ど、の、事、
を、も、委、く、辨、へ、ら、れ、と、る、字、を、清、寧、天、皇、卷、り、注、さ、す。

はて此、新嘗を、始、て、營給へる御田、ふ成と、ぬ稻を、始
て、聞食ある故、信の新嘗、ふを有、り也。尔、比、那、閉、て、ふ、
お、新、嘗、字、を、書、お、れ、ど、 ○聞看、師説ふ。應神紀、ふ、聞看、豊明、
一、事、お、お、思、混、ら、し、そ、 皇極紀、ふ、御新嘗、今、云、お、不、例、を、多、く、引、き、 此言、此意、を、上
み委く云、る、が、如し。今、云、此、説、を、第、九、段、 此、よ、て、ハ、食給
所、知、看、の、処、に、注、せ、り、 ふことあり。ま、と、後、世、ふ、を、も、は、ら、神、ふ、祭、る、事、と、の、み、思
布、た、ま、む。然、も、非、交、神、も、奉、也。人、も、も、饗、し。自、も、食、已、げ
ぬゆ。か、く、ま、む。今、大御神の聞食、に、新嘗、も、此、意、を、以、て、見
べし。此、の、新、嘗、を、と、く、神、お、供、奉、と、る、ふ、と、 何也。此、の
お、此、み、説、お、ひ、を、古、へ、の、意、お、あ、が、り、 文の趣、ふ、て、也。大御神、此、み、食賜へる、状、ふ、見、ゆ、れ、む、也。次、

段ふ。神之御衣を織し免賜こと此見ゆると合せて思ふ
み。神も供奉とま子るおや炳焉し。其神を次段 ○新宮。
此ハ新とほまバ。新嘗聞看以料よ。新お造とるふ宮あ也。
おれ新饗を重みし齋まして外也。雄畧天皇卷の采女が
尔比那閉夜とあるを、新嘗屋 哥まと太后此御哥ふ
よて此よ由あは事あるべし。けて新嘗は。元を朝家のみ
あらび。下くまであはて爲し事ふて。其時ハ。いみじく齋
慎然は趣あるを。此の元此所由う因るおとあるべし。其
を万葉十四下總因歌ふ。に布ど正此葛飾早稻を爾倍倍と
とも。そののぬしを戸よ立免やも。袖中抄み。爾倍倍と
て早稻を刈て物して。里隣の者集て食をば。尔倍倍と始免
ありとあり。師云。哥意を。此尔倍を以る節を。慎て門を

も閉て。外人をかよく入。されどもかあしく思ふ男の
來あぞ。門外お立せては。おれとらじ内子入てむと。志此
せ免て。淡き由を免るあり。家持家集と云物よ。我宿の
早田かり。右の哥を。まと同卷 東ふ。おれぞおの屋乃戸
ほしと。ほも此あり。 哥ふ。おれぞおの屋乃戸
おそまざる。爾布奈未ふ。我ぐ夫をや。て齋ふ。此戸を。師云。
尔布奈未。尔比那閉を。東詞みかく云るあ也。上野因の新
田をも。和名抄み。尔布太とあるせり。さて哥此意を。か
此尔閉を以る所へ。夫をや。りて。妻の家。子留居てを免る
あり。人此許。尔閉み。ゆきと。ほ。何と。ふて。も。家の戸を。さ
して。慎齋ふ。おと。見ゆ。さる。時。よ。來て。戸。あ。ど。ある。字。以
を。押。て。開。む。と。以る。を。誰。ぞ。と。咎。と。る。あり。戸。あ。ど。ある。字。以
て。知。ば。し。お。の。意。は。子。の。歌。餘。因。く。ふ。聞。え。ざ。る。を。あ。る。と
ま。ふ。傳。漏。し。あ。依。れ。ら。む。り。も。し。く。を。東。因。く。ふ。は。殊。う。こ
の。所。由。此。殘。る。ば。き。由。あり。し。ふ。や。常。陸。風。土。記。の。處。筑。波。郡。ふ。

古老傳を記して。神祖尊と云神。これを誰神と云こと知べ
伊邪那美命のうちあらむや云。諸神此處を巡行て。駿河
へまど然ちあるまじくこそ。 圀福慈岳おハ即富士山ふ到りて。日暮しうバ。宿請り依み。
福慈神。今日ち新嘗ひとて。家内忌びる由を云て。宿らせ
ざりし故ふ。筑波岳ふ登りて。宿請り依ふ。筑波神。今夜
新嘗ひまども。敢尊旨を奉はらて有はきとて。飲食を設
けて。敬祇免りし故事もあまぢあひ。○陰屎麻理散矣。
比曾加爾久曾麻理知良斯伎と訓べし。師云麻理を。大小
便をいるあといひ。万葉十八ふ。屎遠久麻禮。竹取物語ふ。
燕の麻理置る舊屎あといひ。今世み大小便を取器を麻

布第十二段 考合考べし ちて是所爲を。仲哀天皇卷。大祓詞古ふは屎
戸を云也。今云此事を。彼卷 ちて爾閉りて。万を慎み齋
ふるふ處乎。如此穢はし死行し給ふ。荒備給ふことの
甚し死あひ。○如屎者は。師云久曾那須波と訓べし。ちて
如此詔ふ意を。屎の如く見るを。屎は非也。酔て吐散ち
る物ぞとれぬ。おは屎あ依あやハ知看あがら。屎うあら
ぬさまふ。詔ひあせるれぬ。抑酔て吐は己あといひ。處を
も擇みあすぬあといひ。又屎とて。穢も淺き故ふ。かく
詔直し給ふ。御恩愛の深きぞかし。或人問此の御詔み
ち有し。篤胤答。惠比と云言を。酒み限るまといひ。非也。世
りも船ふあふ。駕よあふ。人よあふ。あといひ。惠比て

ふことを何よも云を思ふべし。故記傳に酒を酔て云云や言れし。その酒てふ言を省きて此を取れるあり。○登許曾を語辭あて。次あるも同じ。○如此爲歟米を。良牟と同くて推度辭れり。と言れし。依れ。米は許曾此結あて。○地矣を。登許呂袁と訓べし。惜登ハ本よ。阿多良斯登とあるを。師説ふ依て字をたて。於その師説を記傳首見ちて此御言を。師云田よあるはき地を費して畔を毀ち。溝をも埋て。其地をも皆田よ爲むとの所爲よ。あそ有免。と云意あり。此も惡を善に詔直し給ふ。あとの右う同じ。一ッ。我那勢命と詔ふ。弟命を親愛み所思看に。御心此程見えて。甚も有がぬくこそ。○雖詔直給大御神の。か

く見直し詔直し給ふことは。上第二十七段。よ委く言る如く。神直毘。大直毘神の。和御魂よ坐まはる。故ありけ。其を祝詞よ。神直毘命。大直毘命。見直志聞直志と云ひ。神直日大直日爾。見直志聞直志。あどあると合せ考へて。此理を辨ふは。○轉場轉一字を。宇多氏阿理と訓む。焉を語終るのみあり。置師言ふ。是を本と有。あとの愈進て。殊よ甚あくあるを云言あり。万葉十二よ。何時あも戀は有。とは有。びとも。う。あて。比來戀の繁も。ま。二十よ。秋とい。牙巴心ぞいと。支。宇多氏け。み。花よ。素。ぞ。牙。て。見。は。く。布。に。う。も。あ。布。多。り。也。開。て。見。る。べ。し。源。氏。葵。卷。よ。紫。上。の。髪。の。あ。と。を。う。と。て。所。せ。う。も。あ。る。う。形。い。う。み。お。ひ。や。ら。む。と。あ。ら

むと云ひ同巻よ年ごろあはまと思ひ聞えおるをかとはしよもあらざりなり人の心こそうとて何ゆものハ
あま云くおまらもいと此等ふて心得べし。轉字を書は
と甚しぬある意あり。轉進む意を取あるべし。と何也。お不此言の種くふう
おまのさまを委く記
し置れおるを其在安康天皇卷宇多氏物云王子此処武
烈天皇卷設奇偉之戲と何る処おどよ注せり合せ見る
べし。此ふ依てお不按ふ。宇多氏此宇多。宇都流の宇都もと
同言あるべし。宇多く寢宇都く寢同言あるべし。扱此ふ轉
くお不ゆるおど思ひ合はべし。
と云おきて。此次よ。其うゑて何る所行を云也。○上件速
須佐之男命此荒ませるまとを。此ふ取總て言は。禍津日
神の御心ふおむ有るは。然るを此神伊邪那岐大神のい
多く汚穢を惡み給ふ神靈ふ依て生坐し。須佐之男命此

荒御魂として。屬副坐にぐ故よ。須佐之男命の神性此本
とめ穢事を堪忍あるふこと得給をぬを。初免大御神此
御命蒙也。宇氣母智神の許ふ到、とる牙依程まで。御心
此いぞ穩ふ坐ませるを。彼神此尻口とめ出、とる物を以
て。御饗進也給ひしうば。彼穢り堪まはぬ御心此熾ふ
起也。我尔然る穢物進るをいぬふぞとおも不て也ま
し。彼神を忽ち擊殺し給ひ。その御健心のお不熾を依よ。
疾く天上ふ歸坐して。具ふ其事を白し給へ依。其御心を
推量奉依り。然る汚穢き所爲ある神を殺おるハ。實も然
る事と。大御神の詔ふはくも所思看けむを却也。甚

く御怒坐して。汝を惡神と咎とるひ。相見じを詔ひて。志はしの程うは有しうぞ。離めて住ませるおど。御心の外ある御事ある。憤ろしくも所思看からせど。姉命此御怒よを面勝ぬるふことも得爲とまはて。畏はす坐れむを彼穢たしく忌ハしく所思看れ神の體も。生まると種々の物を。大御神の御覽して。此を顯見青人草の。食て活べき物ぞと。甚く喜バして。殖生し給ひ。蠶を養ひおど爲給ふを。いぞ益あく穢たしく所思看て。いとくまはまは。御荒心の熾みぬめて。それ止てむと所思看れものうら。大御神此ものし給ふ御事ある。謂おく妨げ給ふ事

は得爲とるはて。御誓も勝ませる。勝布こすの御態よあ。とせせて。かくを荒び給へるおはばし。其を始り。男御子既し我勝と詔ひ。天照大御神も許諾とまへり。其を上策三十五段も。天照大御神方。知看須佐之男。命之固無惡心矣。とあるを思ふべし。かく事の定。とるも此ままと如此吾勝ぬと云て。荒び給ふことハ。事をとせ給ふあらでい。うも其やぐて。荒御魂の進みぬ。世の學者とち此謂有む。徒に空理を此み云て。此を思わざるハ。いふそや。さて書紀一書も。日神之田有三処。焉号曰天安。天平。天。邑并田。此皆良田。雖經霖旱。無所損傷。其素茂。鳴守之田。亦有三処。号曰天。織田。天。川。依田。天。口。銳田。此皆礮地。雨則流之。旱則焦之。故素茂。鳴守。妬害。姊田。云くとある。いとく誤るる傳あり。給ふべし。云る如き謂のあれむ。須佐之男。命の御田を營り給ふべし。更此命の神性。此か。る本。因を失と。傳ふぞ有る。師説もいま。故前後の御荒。此狀を見委く思ひ得られ。ざ依趣あり。

る。小總て宇氣母智神の神靈みとて。成れる事どもを
此み妨ふる。少くも餘此事を。害ひ給はざ。依をやと
く事實ふ心を
著て考ばし。

天照大御神御坐忌服屋而織
給神出御衣出時速須佐出男
命穿其服屋出棟而以天斑馬

生剝出逆剝剝而所墮入矣於
是天照大御神見驚動而以梭
傷身發愠而乃入天石窟閉石
戸而刺幽居矣
命見出逆剝天斑駒而投入殿

内^{ヌチニ}一^キ矣^{コニ}。爾^{ワカ}雅^ヒ日^メ女^ニ命^{ハコキ}。驚^テ而^{オチ}墮^{ハタヨリ}機^ニ。以^ニ所^モ持^ル梭^ヒ。傷^{ソコヒ}體^ミ。而^テ神^カ退^{サカリマシキ}矣^{カシ}。故^テ天^{アマ}照^{テラス}。大^{オホ}御^ミ神^{カミ}。謂^リ須^ス佐^サ出^ノ男^ヲ命^ニ曰^ク。汝^{イマシ}猶^{ナホ}有^{アリ}黑^{キタナキ}心^{ココロ}。不^ズ欲^{ホリセ}相^{アヒ}見^{ミマク}。詔^{リタマヒ}出^テ。乃^{スナチ}入^{イリ}天^{アメ}。石^{イハ}窟^{ヤニ}而^テ閉^{タテ}。爾^{コニ}天^{アマ}原^{ノハラ}皆^ニ暗^{クラク}。天^{アメ}下^{ノシタ}悉^{コトクニ}著^{ツケタマヒ}磐^{イハ}戸^{トラ}矣^キ。爾^{コニ}天^{アマ}原^{ノハラ}皆^ニ暗^{クラク}。天^{アメ}下^{ノシタ}悉^{コトクニ}闇^{クラシ}。因^レ此^{ヨリ}而^テ常^{トコ}夜^ヨ往^{ユク}。故^レ庶^{カレ}事^{モロク}燎^{ノコト}火^{トモシヒ}。而^テ辨^{ワキマ}矣^キ。於^コ是^ニ惡^{アラズル}神^{カミ}出^ノ喧^{サト}響^{ナヒ}。如^サ狹^ナ。

蠅^{バヘ}皆^ニ涌^{ミナ}。萬^{ヨロツ}物^{モノ}出^ノ妖^{ワザ}悉^{ハロ}發^{コトクニ}矣^キ。

忌服屋^{イミハタ}之^ノ師^シ云^ク。伊美波多夜^{イミハタヤ}と訓^ムべし。忌^{イミ}を伊牟^{イ牟}と訓^ムを非^ヒぬぐひみぬ伊美^{イミ}と仮^カ字^ジを付^ツけし。さて口^{クチ}み伊牟^{イ牟}と訓^ムを非^ヒと聞^クゆる如^ニく誦^スむを、おのぢうら此^{ココ}音^ネ便^ヒあり。書^シ紀^キ了^スは。齋^{イミ}服^{ハタ}殿^{ドノ}織^{オリ}殿^{ドノ}おど何^ニゆ。忌^{イミ}と云^フを神^{カミ}御^ミ衣^イを織^{オリ}屋^ヤある故^ニみ。乃^ハを齋^{イミ}慎^シむゆるおど。齋^{イミ}斧^ノ。齋^{イミ}鉏^ノ。齋^{イミ}柱^ノ。おど云^フも同^シじ。さ此^{ココ}までの文^{モノ}古^コ事^{コト}記^キ。ま○神^{カミ}之^ノ御^ミ衣^イ也^{ナリ}。本^ホ書^シみハ之^ノ字^ジ無^シと書^キ紀^キみりて記^キせり。曾^{ソノ}と訓^ムれおまど。さてハ神^{カミ}字^ジ守^{モリ}辞^ジとありて。此^{ココ}み神^{カミ}能^ノ美^ミ曾^{ソノ}と訓^ムべし。但^シ美^ミ志^シと訓^ム。神^{カミ}不^レ獻^ス給^フ御^ミ衣^イおど。其^{ソノ}神^{カミ}は。豐^{トヨ}宇^ウ氣^キ毘^ヒ賣^メ神^{カミ}あるおと決^ツし。師^シ云^ク。此^{ココ}大^{オホ}御^ミ神^{カミ}之^ノ祭^{マツル}給^フは。神^{カミ}を天^{アマ}神^{カミ}ぞと云^フ説^{トク}也^{ナリ}宜^シ。

し然るを其天神を天日のおやくいひまると自心神を齋
ふるふおど云説を例此論ふ足更と言れおまどその宜
志と云れとる天神ぞ其由を言はば此神速須佐之男命
せ云説も宜うらべ
ふ殺さえ給へるを其御體ふ生れる物等を大御神の取
し免て種子と爲給するを思ふ其神徳ふ依て生れる
物を殖給ふれまば其御靈を祭とるふべき謂ふ依くお
布言はば皇美麻命御天降の時了豊宇氣神を副給ふと有
を思へし既に殺さえ給へる神を副給ふと云るは其御
魂の謂ふあらばして何ぞ然まむ上り聞看新嘗とある
は新稻此初穂を此神ふ饗奉とるひて御自も聞看し此
の神御衣を初て蠶養して抽ふる御絲を以て御衣を織

し免まば此神ふ獻給はむとの事おす斯在ば天照大御
神の豊宇氣神を祭給へるを神祭此權輿よあむ有ける
うばしこそ後世まで荷前祭神衣祭のもろもちて書紀
ろ御祭の中おもとも重き御祭よ有りぬ
本ふ天照大神方織神衣居齋服殿かく有るを師の書紀
ふよた非然云説を誤りありとせ何也此ふを織し免
云れしハ何ふ見混へられぬむ
給ふと何也彼と此と事違へるふ似ぬれど八千々比
賣命ふ織し免給ひおくも御親も織給へるを書紀了は
大御神の織給へる事のみを傳了此傳を織し免給する
事此み傳へと依れぬ大御神此神宝ふ機具の何るを見
ることをちてかく御自も其服屋に坐て大御手をさす
曉依べし

ふ副給ひ御粹命を其事を掌る司を爲給ふあど。凡て神事を重く志給ふ故ふて。此も熟み考れど。後の人草を愛み所思看ひ大御心とて。豐宇氣神の神靈也。彌益ふ靈幸ひ坐む事を禱ましての御事もあむ何れも依そを上り。彼種ども御覧して。此物等ハ。青人草の食て活べき物。○穿屋棟をぞと喜坐るを以て。察ひ奉るべし。穴とふと。○穿屋棟を。本書棟ハ頂と何ま。師曰。和名抄ふ。棟謂之粹。和名無禰。と今を正字を書か。字鏡ふ。檼楹上横巨者也。棟也。牟禰と何也。○天斑馬師云。和按ふ。忌服屋ハ。四方四角を堅く戸ざし固免とる屋ありと見也。されど。棟を穿ちとるあるはし。○天斑馬師云。和名抄ふ。駁馬俗云。布知無万。説文云。駁不純色馬也。俗云と。

あれども。俗稱と云。後世よは。夫知と濁りて云。牙ども。凡て首を濁る言は。古を無れど。布を清べし。今世も清とあ。ちて。馬を宇麻古麻は。馬とも免也。駒よて。馬子あ也。と和名抄ふも云まど。古を馬を古麻と多く云也。今も然訓べし。書紀より。即斑。○生剝之逆剝く而は。伊那波岐能佐加波岐爾波岐氏と訓べし。此古事記より。逆剝剝と何るを。今私まかく文を重祢て書ること。は仲哀天皇。卷ふ生剝逆剝と重祢云る例も依れり。其古言の躰あまぞ。生あむら逆ふ。尾れ方とて皮を剝あ也。逆剝くと重て云は。皮を剝盡せる状を。強く云る古文也。此例の言。く何也。下の神祝。ちて馬を。宇氣母智神の頂ふ生れる祝。此処に注べし。

物あるを。惡ましてあす。上件種々の惡事此目垂仁天皇

卷ふ出れむそこよも注べし。

○見驚動而之。荒き所行を見て。驚給へはあす。○天石窟

之。師云。必しも實の岩窟ふ之非じ。石と之。あま堅固を云

るふて。天之石位。天之石鞞。天之磐船あどの類ふて。あま

尋常の殿を。かく云ふはあす。書紀の岩窟とある文御

孫命此天降坐處よも。引開天磐戸と何はあま尋常此殿戸

をかく云す。豊石窓櫛石窓も石を多々堅きことふてと

押披氏云くと云るを思はし。天津神いおも。岩屋ふおと

の石を祝と云ふことありと云之非れり。けり万葉十二

の石を祝と云ふことありと云之非れり。けり万葉十二

戸ともと何す。篤胤按ふふ。此をあま眞の石屋れす。然る

は。前ふ之常此屋ありし故。棟を穿とれあり。かま今度

之。岩屋よ籠す給へるはあす。○閉師云。多氏くと訓べ

し。万葉三ふ豊因乃鏡山之石戸立隱爾計良思。あこの立も

闔を云す。今世よもさて闔を立と云所思ハ。縣居大人説

ふ。上代ふ之。戸を常之傍ふ取退置て。闔むとて之。其を持

來て立塞もあす。と云まき。後世の遺戸を此を便をく

戸を上代より何れ。○今俗よ。○刺幽居矣師説ふ。刺は闔

とる戸よ。物を刺て固むる字云。万葉十二よ。門立而戸毛

閉而有乎。まと門立而戸者雖闔。あまふて。多都留と。佐須

ぞ此差^{ワキ}何^{ナニ}依^ヨおとを^ヲ知^チ法^フし。万^{マン}葉^{ヤク}九^クふ。久^ク留^{リウ}爾^ニ久^ク积^ギ作^サ之^ヲ加^カ
多^タ米^メ等^ト之^ヲ。久^ク留^{リウ}在^ニ戸^ノの^ノ櫃^ツあり。久^ク积^ギは^ハ釘^チあり。和^ワ名^ナ抄^{シヨ}ふ。扇^{セン}度^ト
佐^サ之^ヲと^ト何^{ナニ}る。此^{コノ}も。戸^ノ字^ノ刺^シ固^コむ^ル依^ヨ物^{モノ}れ^ル故^ノの^ノ名^ナありと^ト何^{ナニ}
也^{ナリ}。幽^ウ居^キ在^ニ。本^ホ書^{ショ}ふ。許^コ母^モ理^リと^ト何^{ナニ}る^ル戎^ニ。書^{ショ}紀^キふ^ル依^ヨて^テ字^ジを^ヲ何^{ナニ}
也^{ナリ}。於^オて^テ此^{コノ}石^シ屋^ヤ戸^ノに^ニ隱^カ坐^ザる^ルを^ヲ崩^ク坐^ザを^ヲ此^{コノ}云^フる^ル也^{ナリ}云^フ也^{ナリ}。
師^シの^ノ言^{コト}ま^シと^トる^ル如^シく。例^{レイ}の^ノ漢^{カン}意^イ此^{コノ}推^{オシ}度^カふ^ル也^{ナリ}。太^{タイ}じ^ニ邪^{ジャ}説^{セツ}を^ヲ
也^{ナリ}。師^シ云^フも^シ日^ニ神^シ崩^ク也^{ナリ}ま^シお^ハむ^ル此^{コノ}世^ノを^ヲ滅^メぶ^ル法^フし^テあ^リあ^リし^テ去^ク何^{ナニ}れ^ルの^ノし^テ也^{ナリ}。○常^{ジョウ}夜^ヤ往^{ヤウ}は^ハ師^シ云^フ。
登^ト許^コ用^{ヨウ}由^ユ久^クと^ト訓^{クン}法^フし。等^{トウ}許^コ也^{ナリ}未^ミと^ト云^フこ^トも^モ万^{マン}葉^{ヤク}十^{ジュ}五^ゴを^ヲ
也^{ナリ}。常^{ジョウ}夜^ヤと^トも^モ常^{ジョウ}不^フ夜^ヤの^ノみ^ミふ^ル也^{ナリ}。晝^{シユ}を^ヲき^キを^ヲ云^フ也^{ナリ}。往^{ヤウ}と^トも^モ凡^{ソド}て^テ
年^{ネン}月^{ゲツ}日^{ニチ}時^ジの^ノ經^{キョウ}往^{ヤウ}を^ヲ云^フ也^{ナリ}。あ^リく^クは^ハ晝^{シユ}の^ノ無^クて^テ。あ^リく^ク夜^ヤの^ノみ^ミふ^ル也^{ナリ}。

時^ジを^ヲ經^{キョウ}行^{キョウ}也^{ナリ}。万^{マン}葉^{ヤク}四^シふ。相^{サウ}夜^ヤ不^フ相^{サウ}夜^ヤ二^ニ走^{ソウ}良^{リョウ}武^ブ。相^{サウ}夜^ヤ行^{キョウ}と^ト。
と^トニ^ニ。ま^シと^ト空^{クウ}蟬^{セン}乃^ノ代^{ダイ}也^{ナリ}毛^モ二^ニ行^{キョウ}也^{ナリ}。人^{ニチ}世^セに^ニ死^シて^テま^シと^ト二^ニ度^ト九^クふ。
常^{ジョウ}之^ノ倍^{ヘイ}爾^ニ夏^カ冬^{トウ}往^{ヤウ}哉^{ナリ}。此^{コノ}れ^レ正^{テイ}し^ク此^{コノ}と^ト同^{トウ}。○今^{イマ}云^フ也^{ナリ}。後^{コト}撰^{セン}集^{シツ}
了^{リョウ}。や^ヤと^トひ^ヒふ^フ閏^{ニツ}月^{ゲツ}何^{ナニ}る^ル年^{ネン}云^フ也^{ナリ}。貫^{クワン}之^ノ何^{ナニ}る^ル也^{ナリ}。子^シ有^{ユウ}て^テ行^{キョウ}法^フ
き^キ年^{ネン}久^クも^モ云^フ也^{ナリ}。是^シ等^{トウ}の^ノ行^{キョウ}ふ^ルて^テ心^{シン}得^{トク}べ^シ也^{ナリ}。仲^{チュウ}哀^{アイ}卷^{ケン}に^ニ登^{トウ}如^ニ
時^ジ人^{ニチ}曰^ク常^{ジョウ}夜^ヤ行^{キョウ}矣^{ナリ}。於^オて^テ書^{ショ}紀^キみ^ル也^{ナリ}。此^{コノ}を^ヲ故^コ六^{ロク}合^{カフ}之^ノ内^ノ常^{ジョウ}闇^{アン}而^{シテ}
不^フ知^チ晝^{シユ}夜^ヤ之^ノ相^{サウ}代^{ダイ}也^{ナリ}。是^シ天^{テン}下^カ恒^{コウ}闇^{アン}無^ク復^{フク}晝^{シユ}夜^ヤ之^ノ殊^{シユ}也^{ナリ}。と^トも^モ
何^{ナニ}也^{ナリ}。或^オ人^{ニチ}此^{コノ}事^ジを^ヲ疑^ウひ^テ天^{テン}日^{ニチ}を^ヲ二^ニあ^リき^キを^ヲ此^{コノ}時^ジ吾^ガ邦^{ホウ}の^ノみ^ミ
殊^{シユ}ふ^ル愚^ウある^ル疑^ウあり。他^タ固^コむ^ル也^{ナリ}。此^{コノ}も^モ非^ヒざ^ラず^シ也^{ナリ}。如何^ニと^ト云^フ也^{ナリ}。此^{コノ}を^ヲ
彼^カ固^コの^ノ何^{ナニ}此^{コノ}代^{ダイ}何^{ナニ}と^ト見^ミこ^トあ^リき^キを^ヲ以^ヨて^テ云^フ也^{ナリ}。抑^オ此^{コノ}時^ジを^ヲ
こ^トと^トあ^リき^キ有^{ユウ}無^ム知^チべ^シき^キ非^ヒざ^ラず^シ也^{ナリ}。日^{ニチ}神^シの^ノ隱^カ坐^ザる^ル也^{ナリ}。

れむ。万圍共み常闇。○故庶事燎火而辨矣。此一句古語拾
あてしおと疑あり。○故庶事燎火而辨矣。此一句古語拾
遺を取て記せぬ。記紀共み。此事の見えざるハ。と。此を決
絶て然有はき傳あり。さて火字木不燭とあり。○惡神は。
阿羅夫流神と訓べし。其下六段。荒振圍神とあり。と。
全同じきれぬ也。此事委く彼。○喧響を。書紀ふ。此云。淤
等娜比と有り。本書音字を寫るを。師云。此言中古の物
語をぞよも多く見えて。淤登那布とも云也。○狹蠅。師云。
書紀ふ。五月蠅と書る字の如く。五月ごろの蠅あり。然る
を。佐都伎といはて。佐と比み云也。田植る農業を。凡て佐
と云。その苗を佐苗。早苗をしてハ。植る女を佐少女。植始

む。佐開植終るを佐登あど云。如し。さては。其業
はる月字。佐月と云ひ。佐ハ田也云ことあり。夜都米佐須
ネ。皆同じ。佐月をさあ。月。其頃の雨を。佐亂と云也。乱
と心得る也。本末違へり。其頃の雨を。佐亂と云也。乱
を。久しく雨ふるを云。源氏物語。風雨を。空の乱と云也。
ま。と和名抄。麥李。麥秀。時熟。故以名之。漢語抄云。佐毛く
とあり。此。佐も同じ。かく。まば。狹蠅も。田植る頃の蠅と云
謂也。依スモ。あり。かく。まば。狹蠅も。田植る頃の蠅と云
意。此稱あり。其頃殊ふ。此虫を多う。依故ふ。名よ。負る也。
○如字。師云。那須と訓べし。碁登久の古言もて。言本は。似
に。ある也。那と。尔と。通音あり。う。那須を。能須と
訓む。あどを。合せて。思ふ。む。似。此辭。輕太子の御歌。加賀
美那須。阿賀母布都麻。と見え。万葉三ふ。五月蠅成驟騒舍

人五小。五月蠅奈周佐和久兒等あど。猶多うる辭あり。○

涌^{ネリ}之。本^ノ考^ヲ満^トと^アる^ヲを^シ師^ヲ和^キ伎^キと^シ訓^スべし。靜^マ正^シ居^ム多^ク正^シし

物^ノの^起立^リて^騒ぐ^を云^ふ正^シ。師^ト多^ク騒^グ状^ヲを^ノみ^云正^シ

べし。と^シ言^レれ^ルお^まき^どい^うよ^有む^さて^佐和^具て^ふ言^ハる^も

と^異あ^る。○^萬物^之妖^々を^神武^天皇^卷ふ^妖氣^とも^あ正^シ。さ

て^皇美^麻命^御天^降の^事議^此處^くよ^螢成^光神^石根^木立[。]

青^水沫^亦言^語お^まぎ^ぬ種^くの^妖氣^ども^の多^うる^をそ^れ

ふ^準て^此ふ^萬物^之妖^々發^る。と^ある^を想^像べ^し。師^云某[。]

某^悉云^くと^二事^を並^言ふ^皆悉^とを^對云^こと^上ふ^山

川^悉動^固土^皆震^まと^高天^原皆^闇葦^原中^固悉^暗お^まぎ^ぬ有[。]

は^て此^妖氣^ども^は固^土ふ^起れ^依り^て天^上ふ^もか^く依[。]

事^ノ有^しふ^は非^或其^を彼^御天^降の^處了^見え^とる^妖神[。]

此^喧響^ハ固^土ふ^限れ^る事^よて^天上^ふは^然る^事お^くを[。]

と^彼妖^氣を^何時^をり^起正^しと^云こ^と。彼^段ふ^てを^知ら

れ^ざる^を熟^思へ^ど。此^時起^れる^妖氣^はお^まぎ^ぬの^彼時^ま

で^靜ま^らざ^りし^れら^むと^考得^られ^ぬお^正。事^此状^を

此^由を[。]ち^て此^時起^正し^妖氣^を何^かる^神此^所爲^お正^しを[。]

む[。]知^ばら^ぬを[。]師^ト須^佐之^男命^荒び^坐る^小依^て禍^津

を^甚く^違へ^るこ^とあ^りさ^るを^須佐^之男^命禍^津日^神ハ

上^ふ云^ふ謂^ふに^依て^荒び^給ひ^しう^ど第^五十^九段^云如[。]

く[。]解^除の^事み^をり^て御^心を^直正^給へ^るも^のを^もし^此

妖^氣此^二柱^此御^心を^直正^給へ^るも^のを^もし^此

の^御心^を直^正し^共み^止ま^りき^謂あ^るふ^皇美^麻命^の天^降

坐^り時^まで^靜ま^らで^有し^ハ此^神と^ちの^御心^を不^依て^起

れる妖氣あらざりしこと明けし。去て師の須佐之男命禍津日神の事を言れし説ども不た甚く違へる事ぞ多う。あふ深く考ふるよ。伊邪那岐命の豫母都圀を還坐て。御禊し給ふ時ふ。投棄給ひし。彼圀に汚穢ふふれとる。御服物ふ成れ依。水陸此神等の所爲ふて。其に第二十三成まる処に言ふ事。此神等此喧響立て。万物の妖氣を起どもを合せ考へし。志多依ありりゆ。其に神代紀。皇美麻命に天降坐むと依處ふ。彼地多有螢火光神及蠅聲邪神。復有艸木成能言語といひ。まと磐根木株艸葉猶能言語。夜者若燦火而喧響之。書者如五月蠅而沸騰之。あど何るを熟思ふはし。言語まじ死磐根木艸あどの荒び起し。螢成邪神の音ひ

立て。喧がせある状に聞ゆるをや。然らばて磐根木艸のあふ言は。此邪神等を攘平した。武甕槌之男神ふ坐をその語止とるふと。巡行とるふ時ふ。岐神を嚮導と爲給へ依を思ふはし。此神を。豫母都圀を起來る妖鬼を追放あまふ功の坐也。此事第二十二段。あ委く注ゆ。嚮導と爲て。豫母都圀此穢より成る依妖神を攘ハむとの事あ依をや。あ不此第百廿三段。あ委く注ふを見るはし。かくまば。此時起まる妖氣は。須佐之男命の荒びふ依て。天照大御神の隱坐し。大御神の隱坐るふとあ得て。彼邪神等此起立ち。音あひ立とる妖氣もて。もぞを須佐之男命の御荒びとめ事起あまど。此神

の御心よも禍津日神の御心よも非安あむ。世の古学は
本此謂を尋ねて一向に悪事とし言ふ。須佐之男命を
禍津日神と云ふ。慨とさふ。かく委く辨へ言ふ。あむ
○或人問前ふ天津日御國をその萌騰れ依初とて清
明く透とる質よて。其上。火に寄りて。何る故ふ。いと
と明く。けて天照大御神の所知看てとて。其大御光りの
照徹りて。彌く益々明きとし云ふ。此を古傳の趣也。然有
げふ聞ゆるを。此説第九九段に注りき此時大御神は隱坐るに依りて。
高天原も葦原中國も常夜往まで暗のてしといふ。答。
此時の事を八十禍津日神の甚く荒び坐て。高天原の君
と坐まは。天照大御神去ら。堪とまをばて。幽居しのば。餘

母ろくは神等も御功德の止給ひらむ事推て知はし。
然るをまば。天に萌騰れる初とて。澄明うる質あるを。あ
ま。産靈大神の造成給へ依あま。其御靈を因て明ら依
を。其火に寄りて輝ぬ。火産靈神の神靈よ因るを
せれ。然るに其神とち此。各々そに神徳は止と給ひぬ
まむ。悉く暗かして。然有るべき謂ふ。此時火神御
庭火あどむのゆ。是に就ても。天照大御神の御徳は。大
御功ぞのこり。依。ある事。想像して奉らば。次文。八百万之神。甚憂と云ひ。
高皇産靈神さる。大御神を出し奉らむと。千ぢふ御心
を盡し給へるを。伊邪那岐大神の不有。如此靈異
之御子と詔へるを。よく思へし。ま

此時の趣を察て速須佐之男命。まゝ其荒御靈。八十枉津日神。此御稜威。此畏く坐まは事をも。想像り奉るばし。然むう。正靈異坐まは。大御神。去ら。志むし。た堪給をびて。天石屋子。幽居ませるをや。然も有れど。伊邪那岐。大御神の。そ此禍を直ちむ料。生置とる。子依。神直毘。大直毘。神此。やぐて。天照大御神の。和御魂。ふ坐まして。終る。其禍を直し給へること。次く。言る。が如く。あるを。最も妙ある。謂。あらむや。あふ等。よく思ふべし。ふらく思ふ。ほし。

故是以八百萬神愁迷而於天

安河原神集集而計可禱奉方

高皇產靈神出命以而於八意

思兼神令思矣此神有思慮出

智淡慮而白曰圖造彼神出象

為云云出謀而宜奉招禱白矣

故是カレコノ天思アメノ兼神カネノカミ
亦タ云マス天アメノ出兒ノ天ミコ

表春命者ウハハルノミコトハ信濃国レ十ヌノクニ阿智祝出祖チノハフリガ

也次子天下春命者ナリマタノミコアマノシタハルノミコトハ秩父国造チハブノクニノミヤツコ

出祖也ガオヤナリ

八百万神師云八百万也數の多死至極を云也万葉小八
百万千万神とも言也然るを書紀み八十神と云ひ八十本

種あど云ふ八種神集シ而テ此言の例下第百六段み出
十十をハ異あり○神集シ而テそまみ師説を委く注法し
此此を誰神の命ともあくオソツカラ己自集へるあ也故師の都
度比ドヒと訓れしフ依ま也都度閉をツドハ世のハ世を切
を云ひ都度比都度自集自集天照大御神の刺幽居して太イミ死
禍事の發オコまるあれば八百万之神とち憂ウレヒは志て誰も集
牙カ神議シく坐マむと集ツひ給ふあ也然有べきあオと小れ
む此此此を師も言れし如く古事記書紀の傳ども皆オ己自
於於天高市而問之之と何依レ也他神此命レもて集ツせとる書
ささまあれレバ彼レを都度閉と訓べし然れども彼レ処レも何
神の命といふことハ見レえレ古語拾遺レ高皇産靈等會
八十万神レを云フる中レくレ疑ハしレこレ皇美麻命の御天
降レ此事議シ給ふ処の例レふレちレて天之安河原カハラ上レ出テて
依テて推當シ書依ルあるべし

そよみも云、依如く、深き由ある川原あるを以て。此處に
集ひ坐る。然り。下におき此川原の事多く見えたり。皆
を書紀の一書に會於天高市。皇美麻命御天降の處
依ハ。處違へるに似されど市と云。人の多く集、所を云言
あれど。お此川原に神等の集給ふ處に依りて。市と云
云ふ。第百廿八段に事代主神に因津神とちを集へ
思ひ合。實は處の異なる傳ふに非びあむ。○計可禱奉方
禱を禰岐と訓べし。能牟と訓む禰具と云。一向に畏りて。
罪を赦し給ふや。請願申は去と然り。扱かく議給へるに。
須佐之男命に荒びに依りて。天石屋戸を刺りて。堅く幽居る。

を。彼神の御爲に。請願白し。出奉むと依る。八百万之神の
神議あり。○高皇產靈神之命以而命以而。御言よてと
云むが如し。但、おの三字、本書に抑此時の神集は。上云
依如く。已自に集へ依ること。論ひ無きも此のら。其集坐
るう牙よて。其上首とる神ハ。高皇產靈神に坐まはると。
言までも有らば。故本書の趣を多く見依り。此神の某、
お令給ふる状ありし。其を此に令思と云まると下にお召
天兒屋根命。布刀玉命。而令占合。おを思へし。此時
おの二柱神も。集ひ坐り奉るとを著明を。殊更にお召て令
給へる。其神に誰神あらむ。高皇產靈神に坐さ冠受や。然

を師の其事を言われざる。故此意を得て。命以而の三
を偶思ひ脱されたるなり。○八意思兼神。記紀ともう。八
意てふ言を無
字を加牙文を成せ依あり。○八意思兼神。記紀ともう。八
意てふ言を無
きをとりて。天神本紀も。名義を下文に。此神有思慮之
見得て。かくて挙たるあり。○八意思兼神。記紀ともう。八
意てふ言を無
智深慮而と有る如くふて。師説ふ思ひて。万葉三小歌思
辭思爲師。せ云へ依思よて。思慮あり兼ハ。今云古事記も
金と作るを借
字あり。數人の思慮の智を一此心も兼持る意ありと何也。
諸八意と云も。思慮の智の卓越とる由の稱號よて。彌意
あり。神名式に。越中、国新川郡。八心大市比古神社あり。
八心大市比古。八心の例あり。あハ八意てふ言義
命の名の処に注
て此神を古事記ま書紀の一書に。

高皇產靈神の子と何る也。共混とる傳ふて。實を天兒
屋根命と同神あり。其由第六十段の徵傳。まは第百三十
三段の徵。委く辨ふるを合せ考ふ
○今思矣產靈大神と申せども。御自思得まは然事
は。うく下ある神も令思て。事を定給牙也。皇美麻命。御
天降の事議し給ふ時あど也。天照大御神も竝坐て。いお
も此神も令思とるへ也。君と何らむ人あど也。此ををく
思ふべき事あらむのも。○圖造彼神之象彼神とハ。天照
大御神を申せ也。きて圖造象と也。大御神の大御形容の
おとふは非也。それ大御身の御光。圖るべき象物を摸
造らむと云ふて。即鏡也。其を下。第五十
六段 天

宇受賣命の言ふ。勝汝命而貴神坐と云て。兒屋命。太玉命。此御鏡を指出示奉れるを思ふべし。古語拾遺。同事を捧宝鏡明麗恰如汝命とあるも趣を異あま。御光を因造れる事の由を聞く。○爲云く之謀而。本み。因造彼神之象而奉招禱也とのみ有まど。此神の思慮も非じと聞云くと。下。設備とる事どもを總とる言ふて。其事どもを悉く思兼神の思慮を
出るゆあり。故古語拾遺。ハ思兼神議曰。宜令太玉命云。下。ある謀事をこ記し。書紀本文。思兼神深謀遠慮。遂聚常世之長鳴鳥云。竟逐降焉と記して。此云くと切と云く。下。ある謀事をみお記し。古事記も思兼神。令思而思。而。下。天。宇受賣命云。く。まての事皆此神の思。謀し。お。と。云。ま。き。今。を。それ。み。依。り。て。文。を。成。せ。り。け。て。

謀は多婆加理と訓べし。ま。と。多。婆。加。理。碁。登。と。訓。む。も。惡。保。經。覽。哥。不。於。蒙。飛。加。祢。多。波。加。利。許。度。乎。勢。佐。利。勢。波。安。万。能。伊。波。度。波。飛。羅。氣。佐。良。万。事。と。阿。此。を。畏。て。刺。隱。ま。せ。る。と。故。ふ。徒。み。禱。奉。り。多。る。む。の。ゆ。め。ふ。て。は。出。給。ふ。は。じ。死。事。を。思。察。ま。し。て。謀。り。出。し。奉。ら。む。と。深。く。思。慮。ら。ち。く。お。ゆ。べ。し。これぞ此神のハ意ありなる。○奉招禱を。遠岐能美奉むと訓べし。遠岐を。即招字の意もて。石屋小隱坐る大御神を。招き出し奉る由あり。此言委くを。第百三十三段。遠岐之八咫鏡云くと。阿。の。處。み。師。説。を。注。を。見。る。ば。し。け。て。禱。字。を。大。御。神。に。出。給。を。む。お。を。を。禱。白。の。事。故。ふ。此。字。を。書。る。お。ゆ。べ。し。○天。表。春。命。名。義。い。お。ご。思。ひ。得。べ。○信。濃。國。の。事。を。下。第。百。十。八。段。ふ。注。を。し。○阿。

智祝チノケ舊事紀神代系。天思兼命天降信濃。阿阿と見え。ま

と天神本。天表春命八意思。信乃阿智祝部等祖兼神兒。之有る

を取て記せ。神名式。信濃。因伊那郡阿智神社。と何依

是。云。谷川氏云。此社。その原と云。処の東北。昼ヒル神カミ邑ムラと

と見ゆ。と云。此因の地名考。一云。孝元天皇五年。天八

意命。見將手力雄命。天降。信濃。因。吾道。宮鎮。座。手力雄命。戸

隱山。迂。座。云。と云。此。風土記の傳。免。き。と。云。○天下

彼。因の古社。傳。と。る。書。を取て。書。る。ふ。ぞ。有。る。ば。き。○天下

春命。此名の義も未思ひ得。交兄弟上と下を對。神名式

小讚岐。因寒川郡。志太張神社。何。云。此社。鴨部郷。東山村

因の式社。考。見。ゆ。おれ。志太波流の例。あり。此社。由。ある。う。○秩父

或人。説。ふ。銀杏チノキの多。かる。處。ある。故。小銀杏チノキ生。る。麻生蓬生

おどの例。あらむ。と云。云。お。お。冠。辞。考。初。の。舊事紀天神

條。ふ。天下春命八意思。武藏。因秩父。因造等祖。と見え。因造

本紀。子。知。く。夫。因造。瑞籬朝。御世。八意思金命。十世孫。知。く

夫彦命。定賜。因造。拜祠。大神。と何。云。此。を。思。ふ。小。崇神。天皇

此御世。ふ。始。免。て。京。を。遣。して。因造。ふ。定。賜。へ。る。ふ。を。非

て。い。と。古。と。り。此。地。小。此。御裔ミコノの住。と。り。け。む。を。知。く。夫彦

命の時。始。て。因造。ふ。任。給。へ。と。此。事。ある。べし。然。云。と

した。拜祠。大神。と何。云。此。大神。を。知。く。夫彦命の祖神オヤガミ。よ。て。

決。免。て。思。兼。神。を。祭。れ。依。あ。ら。む。と。思。を。依。ま。終。あ。り。其。を

神名式よ。武藏国秩父郡秩父神社。この社を貞觀四年七月授武藏国正五位下勲七等秩父神正五位上。同十三年十一月授從四位下。元慶二年十二月授正四位下。おど圀史ふ見也。今在大宮妙見宮と称せや。帳考ふ云り。まよ或云へども其社を舛くして石七。石七。石大明神と云。こま奥社あり。甲斐信濃武藏三國の界みて。白鳥郷大滝村といふところあり。此社あるは。十段ふ委く云ふべし。

於是從思兼神出議而取天安

河出河上出天堅石取天金山

亦名天山出鐵而求鍛人天津麻

羅而科伊斯許理度賣命而令

作日像出鏡全剝眞名鹿出皮

剝而作天羽鞆用此奉造矣初

度所造出二面者少而不合諸

タチノコ、ロニコハ、マスキノクニ、ヒノクマクニカ、スノ
神出意。此者坐木国。日前国懸。

オホカニナリツギニツクレリシヤ。タカミハ
大神也。次度所造出八咫鏡者。

亦云眞。其狀美麗矣。是者伊勢
經津鏡。

オホカニナリツギニツクレリシヤ。タカミハ
大御神也。

河上カミ。師ウチ。齊明天皇紀ニ。川上カミ。此コノ。云イハ。箇播羅ニ。とハ。有ア。ふシ。加カ。波ハ。美ミ。とト。訓ナ。法ホ。しシ。其コノ。河上カミ。の石イシ。を用ヨウ。ふシ。ぎキ。深コホシ。きキ。所トコロ。由ヨリ。何ナニ。

正ただ。取と。れり。るる。あら。むむ。もし師言の如く。加波良と訓べく。此の
み河上と書。○堅石。師説ふ。雄略紀の人名。堅磐とハ。有ア。るる。
を。此コノ。云イハ。柯陀カダ。之ノ。波ハ。の郷名。堅磐ツル。加多カダ。之ノ。方カタ。とハ。有ア。るる。此訓
ふ依ヨ。依ヨ。しシ。後世此言あらむ。加多伊波と云べきをかく云
て。堅ツル。ふツル。附ツル。るる。活イ。辞イ。波ハ。をヲ。伊イ。ちチ。てテ。今イマ。此コノ。石イシ。を取トル。和名抄。鍛冶
波ハ。の伊イ。をヲ。畧イ。るる。るる。れり。ちチ。てテ。今イマ。此コノ。石イシ。を取トル。和名抄。鍛冶
具ツル。みツル。鐵テツ。礎ソ。加カ。奈ナ。之ノ。岐キ。とト。有ア。るる。今イマ。加カ。奈ナ。
斯イハ。伎ヒ。云イハ。此コノ。料リョウ。あら。むむ。はハ。少オウ。有ア。るる。ちチ。てテ。安河原ヤカハラ。あら。むむ。石イシ。村ムラ。をヲ。迦イハ。具ツル。
と云。此料リョウ。あら。むむ。はハ。少オウ。有ア。るる。ちチ。てテ。安河原ヤカハラ。あら。むむ。石イシ。村ムラ。をヲ。迦イハ。具ツル。
土ツチ。神カミ。のノ。血チ。此コノ。激イカリ。越コ。正ただ。化カ。れり。るる。あら。むむ。此コノ。時トキ。其コノ。石イシ。をヲ。用ヨウ。ひヒ。と
依ヨ。るる。所トコロ。由ヨリ。何ナニ。依ヨ。るる。あら。むむ。云イハ。其コノ。由ヨリ。下シタ。ふふ。○天アメ。金カネ。山ヤマ。をヲ。やや。がが。てて。香
山ヤマ。をヲ。云イハ。あら。むむ。はハ。其コノ。由ヨリ。天アメ。金カネ。神カミ。のノ。名ナ。をヲ。金カネ。山ヤマ。毘ヒ。古コ。とト。云イハ。てテ。其

才迦具土神の御母を枯惱しある由の御名お依と。此時
の鏡劔代を。崇神天皇此御世に作らせ給へる時。其
金を大和の香山より取る依れどを以て。然思を依る
也。天香山倭此香山。○鐵也。久呂賀祢と云も。麻賀禰と訓
も。とハ一山あり。催馬樂も。まろ祢ふく吉備の中山れど見也。鉄を
むばし。眞金といふ。信友説。能因。新枕も。まが祢ふくと
を。くろの祢をふくを云と有。さて鐵を取まるを。鏡。刀。斧。
り。おれをき證ありと云へり。鐸おどを作る料れ也。信友云。元亨二年。備中。圀の民部省
圖帳。此圖帳古のふをあらび。後醍醐天皇此御時出來と
依物あり。當時此誤を傳へて。疑しき事も有まど。取
べき事も少うらび。賀夜郡の條。庭妹の貢物。鐵云く。
猶別考あり。待圀司之處。分奉官家。ま。松山之庄云く。假粟以鐵充其

貢代と有て。次。庭妹。鍊胤云。妹ハ妹の誤あり。且和名抄
し。今庭瀨と。松山之領者。雄畧天皇三年。始奉官家。其後連
云地名あり。綿奉之後。三條院御宇。經八九年奉眞金。其後中絶畢。已下
文欠。多。せ。何る眞金也。黄金を云。と通也。おは既くと也。マ。ガ
ネと云名の失果と依か。黄金をマ。ガネとも云。ゆ。せ。心
得て。古。免。加。しく。け。う。あ。ら。言。して。然。語。也。傳。と。る。あ。る。法
し。此。圀。小。鐵。多。り。ゆ。し。事。圖。帳。の。文。を。證。せ。出。べ。し。後。三。條。院。御。宇。
經八九年云く。三條院治世五年。後三條院治世四年。おれ
む。符。の。と。し。按。ふ。三。の。一。の。誤。み。て。云。く。の。後。一。條。院。御。宇。
あるべし。此天皇治世廿五年あり。其の後一條院と何也
し。を。後。三。條。院。と。誤。れ。依。り。此。等。の。書。ど。も。寫。誤。多。く。一。二。
三。の。數。字。互。ふ。誤。を。る。ま。と。少。う。ら。び。此。も。其。類。あ。る。法。し。
又。後。一。條。院。み。て。も。有。べ。し。備。前。圀。圖。帳。も。後。一。條。院。治。安。

二年云く。と云事も有り。と云也。○眞名鹿。眞名を稱辭あ
此天皇治世廿年坐せ也。○眞名子。眞名を稱辭あるを思ふは。此言を第
十一段麻
奈弟子の処よ 和名抄ふ鹿和名加と何也。然れども本語
委く注りた。 加具神の処よ委く
を決て加具あるはく思ふ由何也。○全剝を。本書ふ。此云
注べ けて文の續きを察るふ。此も天香山と取まるあ
也。次段。天香山之眞男鹿と何る。○全剝を。本書ふ。此云
を思ふべし。あや彼処よ注を見と。○全剝を。本書ふ。此云
宇都播伎と何也。次段よ。全拔てふ言何也。師言よ。俗に圓
ふと云意あり。全う骨を抜き全ふ皮を剝バ。中の空虚ふ
あ依意よて。宇都と云あり。と有り。けて全剝くと重ぬ
るハ。剝盡せる事を強く云るれ也。○羽韃を。本よ波夫伎

と訓也。言義は羽吹ふて。羽と皮字云ふ依はし。信友云。
此を上世うた。皮を打はぶきて。火を熾しぬる故の名
や。團扇をうちとはと云も。打をぶく由の名あ依べし。其を
とまれ。鹿皮もて作れ依を。故何依事あ也。むと云也。此
信よ。所由あることあ。けて布伎ふ。韃字を書るは。唐韻
り。其由を下よ云べし。○或
韃韋囊吹火也。と何依あども依まるあらむ。然れども此
を必しも事の信を思ふはうらび。事の信を必信友が説
人の説よ。韃を天と也。布伎と云。此如くあるべし。○或
こと。漢籍ふ有りと云ゆ。信あるう。けて和名抄ふも。唐韻
此此文を引て。野王按。韃所以吹治火令熾也。漢語抄云。
皮袋布岐加波と何依を。今俗にふいがうを云物よて。其

て吹皮フキガハの音便ナラヒ不顔ホホ多依言タあり。ちて此皮袋フキガハと云物也。漢

土此鞞ナラヒも倣ナラヒて作れるあり信友云吹革小狸皮を用ばし。信友云吹革小狸皮を用

々其む本草和名狸を多く介とあり。まは空海僧が性霊

集多り。狸筆四管何依狸小々、何依也。古假字あるばし。

多和名抄ふ云狸多奴妓とありて。今も然云る名依依り。

言信友が考何とれり。さて多奴伎也。多多奴毛也。

踏靴之毛の意あり。是等此はハ。さしハ。日像之鏡鏡。

とは。日神の大御身也。御光也。如き鏡と云ことあり。上の

彼神之象と何る処に云。○二面者ハ。此三字也。今加とる

依て加と知比佐久氏と訓べし。伊佐く加と訓。其由也下

不見也。○不合ス諸神之意ハ。本不ハあり。不合意と何まと

二十一社記不諸神不合意と。まと二十二社記鎮坐傳記亦

とあ依り依て諸神之二字を補へ也。さ依りあり。不合意と

てて也。伊斯許理度賣命此意ハのみ合えぬ由ありを。此

は決キ免て然有まじく。高皇産靈神思兼神を始として。

諸神い初れも小くて也。大御神也。御光子圖ビ也。意ハ合カ

ざドけむと所思レば也。○木圍也。即チ紀伊圍也。木圍

と云由也。下第七段。○日前圍懸大神と也。日前圍

大神也。圍懸大神と也。本不是紀伊圍日前神也と何る

其由下。神名式不紀伊圍名草郡日前神社。信友云日前也

後、その風雅集に當宮の神職紀、俊文朝臣、歌ふ名草山
とるや、神のたきもせ、安神にぞあげきひのく、此宮と
見え、式も去り訓、然るを神代紀、ヒノマへとある
を非、今ヒサキの宮と云ひ、ま、と字音、ニチゼムグ
ウとも云、**罔懸神社**。信友云、罔懸、天武紀、クニカ、ス
ふぞ、**罔懸神社**と訓み、ま、クニカ、スとも、クニ
カ、リとも訓を添、今も然、稱と云、**久爾加、須と唱**
クニカ、スと有、今も然、稱と云、**久爾加、須と唱**
し、**ある是、お、おほ、次、言を見よ。**○**次、度、所、鑄、八、咫、鏡**
者。亦云、**眞經津鏡**。○此も本、**唯、次、度、所、鑄**とのみ有れ
ど、**文、足、ら、ば、お、即、下、見、え、と、る、八、咫、鏡、ある、こと、是**
を、**伊、勢、大、神、也、と、云、る、お、て、炳、焉、八、咫、鏡、也、本、書、古、事、記、**
々、ま、バ、八、咫、鏡、者、四、字、を、加、へ、於、八、咫、鏡、也、本、書、古、事、記、
八、咫、鏡、と、書、て、本、注、ふ、**訓、八、咫、云、八、阿、多、と、何、也、師、云、延、佳**
グ、尺、當、作、咫、也、云、依、ぞ、宜、き、お、を、決、く、寫、誤、れ、る、も、の、お、め、
ま、づ、尺、と、ある、を、強、て、助、て、云、は、**八、寸、を、咫、と、云、ひ、十、寸**
を、尺、と、云、を、常、お、れ、ど、も、周、の、尺、を、八、寸、と、云、こ、を、何、也、又

常、**尺、尺、と、も、連、言、相、遠、く、ら、ぬ、字、お、ま、む、此、記、お、た、佐**
加、お、も、阿、多、お、も、尺、字、を、通、用、ひ、て、此、お、阿、多、と、注、せ、る、も、
佐、加、と、混、る、故、お、り、と、も、云、は、れ、ど、猶、と、く、思、ふ、お、然
お、た、非、也、何、の、古、書、お、お、阿、多、お、ハ、咫、字、を、の、み、書、て、尺、と
書、る、例、お、く、此、記、お、も、即、神、武、天、皇、段、お、ハ、注、お、八、尺、と、何
咫、鳥、と、書、ま、む、此、を、必、咫、字、お、る、べ、き、物、ぞ、注、お、八、尺、と、何
る、も、本、を、咫、一、字、お、お、む、を、本、文、の、誤、れ、依、ら、後、人、の
狡、意、を、改、お、る、ぐ、ま、と、本、文、と、共、誤、る、お、も、有、べ、し、八
阿、多、お、ハ、字、を、上、を、八、尺、と、お、る、から、是、も、狡、意、お、加、お、依、
後、人、の、所、爲、お、め、決、て、削、べ、し、凡、て、訓、注、お、字、訓、を、用、と、る
例、お、く、ま、と、ハ、字、ハ、と、注、ま、
は、き、謂、お、れ、だ、お、上、下、共、お、非、
お、る、こ、と、相、照、し、て、も、知、る、は、し、
か、く、ま、む、此、注、お、訓、咫、
云、阿、多、お、作、る、は、き、れ、也、然、て、古、來、夜、多、能、鏡、と、訓、免、れ、ど
も、か、く、る、稱、の、古、例、凡、て、之、を、添、お、む、夜、多、加、賀、美、と、訓

ばし。例をも思べし。注し阿多とあるを。阿を省くを如何
と云ふ。高天原は天をも云ふ。阿麻と注せまざるも。おほ麻と
訓むと同格なり。一、離ちて言るときハ。天を阿麻。咫を阿多
ハ咫を連言と死を高もハも阿の韻あり。然れど高天
る故も自ら多加麻。夜多と言をるゝあり。云まざる。
實然依説おれバ。尺を咫字に改め記し於。但し師のハ咫
の義を釋まじし説を己都に證ふ。抑此ハ咫の義を古今小
こと能をび其由ハ末に云べし。種々の説多々依中ふ。古く兩手を相加へたる廣と云ふぞ
正説ある。其を釋紀に延喜公望私記云。于時戸部藤卿進
曰。嘗聞或説凡讀咫爲阿多者。手之義也。一手之廣四寸。兩
手相加正是八寸也。今云ハ咫者。是ハ六十四寸也。蓋其

鏡圓數六尺四寸歟。其徑二尺一寸三分餘也。是則今在伊
勢大神也。按ふ。此文ハ八寸也と云までを。戸部藤卿の嘗
聞知とる古説もて今云と云るをゆ以下を。此
主に按と聞えぬ。然て是を下文を。釈紀の撰者此説
と聞也。文を去ばて。要を摘て出せれば。其意を得て見る
べし。而天徳内裡燒亡之時。御記曰。天徳四年九月二十四日。
鑿求温明殿所納之神靈鏡。竝大刀契等。申時重光朝臣來、
申云。瓦上在鏡一面。其鏡徑八寸許。頭雖有小瑕。專無損圓
規竝蒂等。甚分明。見之者無不驚感。云々。先師申云。天徳回
祿之時。件神鏡内待所在。灰燼之中。不燒損。其鏡徑八寸許。
頭雖有小瑕。專無損之由。御記文炳焉。然則彼ハ咫鏡。徑八
寸歟。重窺太神宮式。禰代一具。高二尺一寸。深一尺四寸。内、

徑、一尺六寸三分。外徑、二尺云々。若就講書之說者、圓數六尺四寸。其徑、二尺一寸三分餘。難奉納彼御槌代内八咫之義、已以相違、旁非無疑也。六寸上ある今云八咫者是八寸、六十四寸也。蓋其鏡、四數六尺四寸、欵其徑二尺一寸三分餘也。と云、藤卿の說を破れるも、尺を八寸として、八咫を六尺四寸とす、圍の度みして、徑二尺一寸余ありと云は、釈論ひとる如く、伊勢神宮の御槌代此度み可そびせ云今按、咫字者、說文中、婦人手長八寸、謂之咫、周尺也。夫天照大神者、陰神也。件御鏡、已奉圖大神之御像、然者摸婦人手長、奉鑄之於八寸、歟。寸法相合、御記文之上、非無所表乎。加八字者、神道之所尊、爲八卦數之故、歟と云。師唯、八寸と見れむ、八寸言由、おし、神道八を尊ぶと云、免れども、由おた言を漫ふ加、ほき、非、古凡て然る

事あしまと女人の御手、此長さおと云、漢字の注、依れる例の非、説あり、ま、八、七、八の八、非、例、此、弥、の、意、よ、して、約、免、て、二、八、一、尺、六、寸、お、し、て、周、を、以、て、此、説、名、く、ほ、き、よ、非、ざ、れ、む、お、ほ、彼、御、槌、代、の、度、み、符、を、以、て、此、説、の中、お、八、六、尺、四、寸、の、説、と、お、此、今、按、の、説、こ、そ、惡、く、る、免、ま、其、餘、に、皆、當、れる、説、お、也、然、る、を、ま、お、是、天、德、四、年、此、災、に、罹、り、給、へ、る、戒、所、三、所、は、石、戸、幽、居、此、時、お、鑄、れる、本、物、に、非、也、崇、神、天、皇、の、御、世、了、彼、三、面、お、擬、造、ら、ま、と、依、物、お、也、御、記、の、文、お、徑、八、寸、許、と、ある、を、即、謂、ゆる、八、咫、鏡、と、外、記、の、文、お、長、六、寸、許、と、ある、を、即、謂、ゆる、伊、勢、大、神、と、云、り、ま、鏡、よ、て、上、此、本、文、お、少、而、不、合、諸、神、之、意、と、ある、二、面、の中、の、一、面、お、り、今、一、所、の、漏、訖、破、損、と、ある、を、其、二、面、お、中、に、一、面、お、り、漏、損、と、ま、へ、る、故、み、其、度、は、知、ら、れ、ざ、る、あり、斯、て、此、二、面、お、日、前、因、懸、の、二、大、神、の、然、ま、お、頭、雖、有、小、瑕、御、お、る、故、み、紀、伊、國、御、神、と、云、へ、り、

とある小瑕を焼損する瑕ふを非は。是まと釋紀了。大仰云御記文神鏡小瑕如何。先師申云此記一書文日神方開磐戸而出焉。是時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存云く就之思之。今内侍所神鏡者崇神天皇御時更所鑄也。然則本鏡有瑕所鑄之新鏡不違本様鑄付其瑕之條。明白者歟。と云依ぐ如し。まと同釈。又問天德御記文鏡頭何答此紀第五卷領巾頭訓ヒレノハシ以之按之鏡頭可讀カバ三ノハタ也先師申云御記文頭之瑕者端之義歟且以頭字讀波多者當紀之說也とあり此紀 けて如此。そとも當紀とも云るを即日本紀を指せ也。此小瑕をけへる本様字違へば鑄付し免給ふまぞ況て其三面此大小丸度を違子給まじきまと決く其徑は八

寸許とあるふ據りて想像奉れむ其本鏡を八咫鏡と云依八咫を八寸許あることを著し。然て咫の本語を阿多あるが其はやがて手の義あり。故其横徑を用ひて物の長を度るを阿多と云ひ其數此彌加ま依を八咫と云ふ。一手の廣さ四寸あれむ。兩手うては八寸れ也。其度依御鏡ありし故。八咫鏡と謂ふ。と云る義ふて。此を公望私記ふ。嘗聞と言依説ふまむ。延喜以前の古説あること疑あり。大今世人の手の度を驗むるも我等中人の七寸内外ある物あるが卓さる巨人を八寸余或は九寸巨除るも希う何正然るを屋代弘賢ぬし近世聞えし手は長一尺横四寸あり相摸の最手ども丸山と云ひし

が手の長八寸横五寸あり。釈迦が嶽と云るが手を長八寸三分横四寸二分あり。籙が嶽と云るが手を長九寸横四寸四分あり。谷風と云るが手を長七寸四分横四寸二分あり。分あり。雷電と云し。熊本より出て。名高かりし。大空と云る。ま。近頃。肥後の熊本より出て。名高かりし。大空と云る。グ手。長九寸横四寸五分。有る。清正。ぬしの。両手を並べて。ハ。八寸あり。大空。グ。両手を並べて。九寸あり。然ま。バ。古く。片手の横徑を四寸とし。も云る。ハ。其大凡の定免。み。ち。て。此。咫。字。を。上。の。釋。紀。も。引。ぬ。る。如。く。説。文。あり。々。依。ち。て。此。咫。字。を。上。の。釋。紀。も。引。ぬ。る。如。く。説。文。解。字。小。中。婦。人。手。長。八。寸。謂。之。咫。周。尺。也。从。尺。只。聲。と。有。也。て。手。腕。の。界。ある。横。文。と。ゆ。中。指。の。末。ま。て。字。度。れる。度。を。謂。ふ。字。也。唐。土。み。て。も。上。古。も。人。躰。み。法。を。取。て。度。量。之。躰。為。法。と。何。依。を。始。免。諸。書。を。引。て。既。み。第。五。段。八。尋。殿。の。所。み。云。る。を。合。せ。考。ふ。べ。し。○。按。ふ。説。文。の。中。婦。人。と。何。の。婦。を。決。免。て。行。ふ。也。此。然。れ。也。兩。手。此。横。徑。八。寸。許。の。を。別。考。へ。と。る。もの。あり。然。れ。也。兩。手。此。横。徑。八。寸。許。の。

稱ふを當まども。片手の横徑四寸を謂ふ。阿多てふ言うは當らぬ字あり。然依お舊く此字を用ひ來ゆしを。四寸謂某と云ふ。漢字あきぐ故ふ。此御鏡の彌阿多あるぐ。中人手八寸。謂之咫と有る。偶み相似とれ也。強て當ある字おこ也。然有まきぞ。如此舊く用ひ倣て。漢字の本義を何うはま。皇國ふて。阿多四寸の字と定免とれバ。其意を用むお難れ。古事記日本紀を靴せりし人くも。既許ある御鏡を八咫鏡と書き。頭の然むの。大なる。大鳥を。八咫鳥とを書れ。儲く考へ。定免て。後。思。子。む。前。子。彫。と。成。文。お。神。代。紀。み。猿。田。彦。神。の。有。状。を。記。して。其。鼻。長。七。咫。云。と。何。の。文。を。取。と。る。ハ。過。失。あり。々。巴。其。由。を。第。百。三。十。六。段。の。然。ら。ば。古。言。ふ。手。を。阿。多。と。云。依。證。傳。み。論。ふ。を。俟。べ。し。

あはやと云む。美斗阿多波志の阿多を更あは。與能^{アタラシク}。
當^{アタリ}の阿多神^{ミコ}名^ナり。奇稻田美等^{ミト}與^ト此阿多^{アタ}ま^マと神^{カミ}吾田津^{アタタ}
比賣^{ヒメ}此吾田^{アタタ}も手^テと出^イて。大隅の地名と爲^ナれる。火須
曾理^{ミエ}命^{ミコト}の末^{シユ}。阿多^{アタ}隼人^{ウツヒ}。阿多^{アタ}御手^{ミテ}犬養^{イヌカヒ}。おぞ云^{イハ}ふ姓^{セイ}も是
と出^イて。阿多^{アタ}鶉^{ウツ}養^{カヒ}此阿多^{アタ}も同義^{ドウギ}。大和の地名と爲
れる事^{コト}あど。次^{ツギ}く傳^{ツタ}へし。母^{ハハ}て行^{ユキ}を俟^{マテ}て見^ミべし。第七十一
段第八十
八段^{ヤチ}第百四十六段^{ヒャクシヨクジュウロク}第百五十九段^{ヒャクゴジュウキウ}の傳^{ツタ}ま^マと神^{カミ}
武天皇^{タケノミコ}卷^{マキ}阿多^{アタ}鶉^{ウツ}養^{カヒ}の所^{トコロ}あどを^ヲ見^ミて知^チるべし。けりて手^テを
阿多^{アタ}と云^{イハ}ふ言^{コト}此本^{コノホ}義^{カヒ}ハ。未^{マダ}思^{オモ}ひ得^エざまど。此^{コノ}を天都御^{アメノミ}罔^ム
の古言^{コノコト}ありし。阿^アを自^{オノ}らみ畧^{ラク}して。多^タあるを。相^{アヒ}通^{トウ}して
氏^{ウヂ}と云^{イハ}ふ。然^{シカ}れハ。手^テ肘^{ヒジ}掌^{ウラ}中^{ナカ}飄^{ヒラ}手^テれ^ノの類^{ルイ}ある多^タを。

稻を伊那。酒を佐加。目を麻あど。第四音を第一音小轉^{ウツ}し
言^{コト}ふ例^{レイ}とを別^{ワケ}ふして。氏^{ウヂ}と云^{イハ}ふ。却^{カエ}して多^タ此轉^{ウツ}まる語^{コト}あ
は。也^{ナリ}所思^{オモ}ふれ^ル也^{ナリ}。師說^シ。手^テは執^{シツ}あり。登理^{トウリ}を切^キれ。知^チれ
る例^{レイ}多^タし。とあり。氏^{ウヂ}を本語^{ホンゴ}として云^{イハ}む。ハ。然^{シカ}も有^{アル}べし。
まど。本語^{ホンゴ}を阿多^{アタ}の阿^ア字^ジ省^{シユ}へる言^{コト}れ。まば。此師說^{コノシ}を用^{ヨウ}ひ
あむ。抑^{オス}阿多^{アタ}を。手^テ此義^{コノカヒ}ふて。一^{ヒト}手^テの廣^{ヒロ}四寸^{シユウ}あるを。二^{フタ}竝^{ナラ}
ば。八阿多^{ヤチアタ}と云^{イハ}ふ。動^{ウツ}あき古說^{コノコト}あは。を古學^{コノガク}此人^{コノヒト}く。あ
を熟^{ユク}く明^{アキラ}し用^{ヨウ}ふ。其向^シく。新說^{シンセツ}を出^イせる。如何^{イカニ}ある事^{コト}
ふ。あ。神武天皇^{カミヤマトウ}卷^{マキ}八咫^{ヤチ}
鳥^{トリ}の処^{トコロ}に注^ツふべし。けりて鏡^{カガミ}の名^ナ義^{カヒ}は。師^シ云^{イハ}ふ。炫^{ケン}見^ミあ
は。と有^{アル}也^{ナリ}。○眞經津鏡^{マコトツツミカガミ}名^ナ義^{カヒ}いまど思^{オモ}得^エ。○是^{コノ}者^{モノ}伊勢^{イセ}大
御神^{オホミコ}也^{ナリ}。此^{コノ}時^{トキ}鑄^{ツグ}る八咫鏡^{ヤチカガミ}は。やのて伊勢^{イセ}の伊須受能宮^{イセノミヤ}

小坐こま比。大御神おほみかみよ坐まま比由よしあり。此こゝ處こゝ子こ鎮ちん坐ま比よしとして。第だい百ひゃく三さん十じゅう四し段だん及および垂た仁に天てん皇こう。卷まき二に十じゅう五ご年ねんの處ところ。○上かみ件けん三さん面めんの神かみ鏡かみ比よしとして。此こゝ處こゝ委あづかりま注しゆふを見みるばし。了し取と總そうて言いひむ。其そのをまたば。此こゝ時とき比よし三さん面めん比よし神かみ鏡かみの。御おん行ぎやう末すえのカラムレ大おほ畧りやくを。皇こう美み麻ま命のみこと御おん天てん降くだの時とき。大おほ御みかみ神かみ比よし。大おほ御みかみ手て扱あつかうらら投な給たまひて。皇こう美み麻ま命のみこと比よし持も降くだ比よし給たまひて。此こゝ事こと委あづかりま第だい百ひゃく三さん十じゅう四し段だんよ注しゆふべし。宗むね神かみ天てん皇こうの御おん世よまで。大おほ宮みや内うち小こ齋い奉ほう比よし給たまひて。此こゝ御おん世よ。伊い斯し許こ理り度た賣う命のみこと比よし御おん齋いの鏡かみ作つくふ命のみことて。代しろの御おん鏡かみをな擬な作つくらせ給たまひて。其そのを大宮みや内うち小こ齋い奉ほう比よし給たまひて。三さん所ところ恐おそ所ところとまと内うち侍しやく所ところよ坐ま比よし故ゆゑふ内うち侍しやく所ところの神かみ鏡かみとも申まを奉ほう。此こゝ神かみ代しろるあり。則すなはち草くさ薙は劔けんと並ならびて神かみ至いた比よし鏡かみ劔けんとハ申まをあり。此こゝ神かみ代しろとめの三さん面めんの神かみ鏡かみをな。豐とよ鉏あ入い毘ひ賣う命のみこと比よし託たくて。鎮ちん坐ま比よしべ

き地ちを求もとめ給たまひ。日ひ前まへ因よ懸ゆ二に大おほ神かみは。初はつ度たよ鑄くわとる木き因よ小こ鎮ちん坐ま比よしを。此こゝ事ことも第だい百ひゃく三さん十じゅう四し段だんよ委あづかりま注しゆふ。伊い勢せ大おほ御みかみ神かみを。次つぎ度たよ鑄くわ鏡かみを申まを比よし垂た仁に天てん皇こうの御おん世よ。始はて今いまの伊い須す受う宮みやよ鎮ちん坐ま比よしぬ。かくて。大おほ宮みや中ちゆう小こ齋い奉ほう比よし給たまひ。御おん擬な造ぞうの神かみ鏡かみの御おん事ことハ。諸しよ書しよの傳でんよ據よりて。信しん友ゆうが想おも像やう奉ほう比よして。考くわう記きせる物もの何なにゆ。今いまそれ比よしえう何なにる處ところを摘とりて記きさむ。また日本にっぽん紀き畧りやくよ。天てん德とく四し年ねん九く月げつ廿にじゅう三さん日にち夜よふ。内うち裡り燒や比よしの事ことを記きして。今いま夜よ亥がい三さん刻こく内うち裡り燒や比よし云いく。丑うし刻こく火ひ止とと記きし。廿にじゅう四し日にちの處ところ。昨きのう夜よ鏡かみ三さん名な和わ加か之の古こ呂りよ。竝ならび大おほ刀たう契けい不ふ能な取と出しゆ。今いま日にち依よ勅とく令れい搜しゆ求くわう餘よ燼じん之の上うへ。已い得え其その實じつ。但た調てう度た燒や損そん其その真ま猶なほ存ぞん形かた質しつ不ふ變へん甚しん爲な神かみ異い云いくと

云ひ。まゝ十月三日、條ふも。此御鏡の事多記して。賢所三所。一所鏡、件鏡、雖在猛火上、而不漏損。即云、伊勢大神云く、一所圓形無破損、長六寸許。一所鏡、已漏亂破損。紀伊、圀御神云く、神宮雜例集ふ、寛平、燒込、始、燒給、雖、陰、四、矩、不、關、と、何、る、ハ、此、天、德、の、度、れ、お、と、を、誤、正、傳、と、る、あり。まゝと釋紀ふ引る。天德御記ふ。此度の燒亡後の事を記させ給ひて。瓦上在鏡一面。其徑八寸許。頭雖在小瑕、專無損。圓矩并蒂等、甚分明。見者無不驚感云く。春記ふも、天德、燒、不、燒、損、給、外、記、云、日、威、所、三、所、一、所、鏡、而、不、漏、損、即、云、伊、勢、と、何、り、大、神、一、所、山、形、無、破、損、一、所、鏡、已、漏、亂、破、損、紀、伊、圀、御、神、云、云、く、一、所、長、六、寸、許、也、一、所、鏡、云、〇、此、御、記、の、文、紀、紀、の、印、本、よ、て、寫、誤、れ、る、お、と、も、有、を、古、寫、と、見、え、小、右、記、ふ、も、本、ま、と、日、本、紀、畧、お、ぞ、み、按、て、正、し、つ、

村上御記を引て。此度の燒込事を記され。瓦上在鏡一面。其鏡徑八寸許。頭雖有一破、專無損。四規并蒂等、甚以分明。露出、俯縁、破瓦上見之者、無不驚感。〇俯字、著聞集ふ依て、おれを補へり。さて以上を御記の文あり。以下ハ地の文あり。此村上御記の文上より引る。紀紀の文と、少く異あり。云く。故殿御日記云。恐所雖在火灰燼之中、曾不燒損云く。鏡、三、面、伊、勢、大、神、紀、也、見、え、こ、也、小、右、記、を、小、野、宮、右、大、臣、伊、圀、日、前、圀、懸、云、く、藤、原、實、資、公、の、記、あり、公、を、寛、德、二、年、正、月、十、八、日、九、十、二、よ、て、薨、給、へ、る、を、推、の、不、せ、て、數、ふ、れ、む、天、德、四、年、ハ、七、ふ、あり、給、ふ、時、あり、なり、遠、う、ら、ぬ、世、ま、と、寛、弘、二、年、十、一、月、十、五、日、子、内、裡、燒、込、の、事、の、事、あり、刻、を、錄、さ、れ、る、下、ふ、火、起、温、明、殿、神、鏡、所、謂、大、刀、并、契、等、不、能、取、出、燒、込、鏡、僅、有、蒂、自、餘、燒、損、無、圓、規、失、鏡、形、百、鍊、抄、裏、の、事、を、内、侍、所、灵、鏡、燒、損、半、と、何、也、ま、と、春、記、ふ、と、見、え、日、一、條、院、御、時、四、規、損、と、何、る、を、此、や、死、の、事、あり、

本紀畧ふも。此焼込の事を十一月十五日子時宮中火殿上
皆焼込云く。神鏡同焼損。即大御神の御あり十六日云く。
炭中神鏡二面奉求出之。此二面とハ謂ゆる紀伊國日前
年七月三日の下召公卿於御前定申諸道勤申神鏡事
不可鑄改之由群議了今日御前籬中小蛇出來とゆゆ因
よ記しとゆふ據て畏みく謹て恐所の神鏡の御形
を想像奉依り。今も尋常ふ有ぐ如き圓規して。柄帯とゆ
即柄あるはし俗よ。ゆる御鏡あるはし。其を彼村上御記
手と云ものあり。釈紀ふた專無損圓規并蒂等甚以分明也。
了。頭雖有一破。小瑕と有鏡僅有蒂。自餘燒損無圓規失
と見え。小右記寛弘二年の文の鏡僅有蒂。自餘燒損無圓規失
鏡形とゆるを考合せて。志う想像奉ら依る。あ正。さて蒂

とゆ依處を。即柄あるはし。字書ふ。蒂瓜當也。當底也。華當
也。あど見えて。草木此實の布ぞと云物あるはし。此を俗言
と云實を摘取て。蒂ホカあがら。や。著ツキとる枝をもうけて
云終まど。あを俗言まを即鏡の柄の義小假借うあずて。
蒂字を書せ給ず依あるはし。小右記も蒂と書れしハ
御記の文字小假借をましあ
むらまよ御記も。頭とあ依處を。彼神鏡の柄を下として。其
上方字詔する文あるはし。今も鏡作あどの詞も頭とも
上とをも云れり。まよ柄を古く
を下とも云りと思たまて。礼儀類典み引まゐる。大成録
の衆人装束のうち銚の製さまを圖しとる下よ。柄長七
尺三寸許。黒漆之徑一寸三分許。下有石突長二寸許。如鏡
下とありて。其石突の処。如鏡柄と云。かくて天徳の度ホド素モトをゆ。此圓規形并蒂も。
如鏡柄と云。かくて天徳の度素をゆ。此圓規形并蒂も。

擲をれ給ふとあくとあく甚分明イトアキラカ小坐コウるを寛弘キヤウワウの度トキよハ。
 僅ヒト小コ蒂テ存ゾク多タる牙キバまぎ、自餘ホカハ燒損ヤケをきて、圓規エンキも爛タれ
 込コて、鏡カミと申コト出デづき、たうタウの御形ミカタよハ。見えさせ給タマえざ
 べ、於オる由ユあべ、とく考カウ合カせて、想像ソウゾウ奉ホウべ。まマと此コノ神鏡シノカミの御
 形貌シヨウボウをゆ、推察オシカカへて、高天原タカマノハラよて鑄ツクラレとるへる。本御鏡ホノミカミ此御
 形をも、伺奉ヒカガヒられぬり。或人問、蒂と柄の事ありとの考、然も有べく、聞ゆまども、柄あらむ
小、鏡の全躰と共、小燒爛るばき物あり、然まば、蒂とハ、
裡小付とる紐付を云ひて、決免て、今傳むる紐付の丸鏡
あ、依べくお、お、頭とハ如何、答、丸鏡あらむ、頭と云
ま、じきもの、お、頭とハ、尾、對ひとる言、小、頭と云
尾、お、と云、予、云、お、御鎮坐傳記、お、此、御鏡、此、事、を
物、を、や、と云、予、云、お、御鎮坐傳記、お、此、御鏡、此、事、を
八、葉、形、也、中、臺、口、形、座、也、と、お、る、ハ、咫、を、古、語、ハ、頭、也、ハ、頭、花、崎、
ど、も、の、有、を、も、和、漢、の、書、を、考、合、せ、て、ハ、花、崎、鏡、ま、る、紐、付

の何、依、鏡、を、も、と、漢、土、此、製、状、の、う、於、り、渡、來、し、も、の、あ、る
 由、を、も、具、小、辨、と、る、説、ど、も、此、委、き、本、書、有、る、を、今、を、此、處
 小、要、と、あ、る、こ、と、を、文、此、考、了、て、此、時、鑄、多、る、予、也、し、
 を、程、と、く、摘、て、記、せ、ぬ、お、也、
 三、面、此、御、鏡、此、御、形、大、抵、小、想、像、奉、ら、れ、と、也、但、し、其、中、小、
 言、義、を、阿、多、を、聞、と、云、言、と、同、義、み、て、手、の、人、指、と、中、指、と
 を、の、へ、て、其、開、き、と、る、間、を、云、こ、と、あ、り、と、て、委、く、論、へ、る
 説、何、ま、ど、已、が、八、咫、の、考、を、上、小、云、る、が、
 如、く、お、れ、右、此、説、を、取、ら、さ、る、あ、り、
 ち、て、御、記、お、日、前
 固、懸、二、大、神、の、御、を、長、六、寸、許、と、記、さ、せ、給、ひ、伊、勢、大、御、神、
 の、御、を、徑、八、寸、許、と、記、さ、せ、給、へ、る、御、文、意、を、想、奉、る、小、徑、
 と、何、依、を、蒂、を、除、て、圓、形、の、處、此、さ、し、也、と、依、許、を、詔、へ、る
 小、て、長、と、あ、る、を、頭、上、と、也、蒂、下、ま、で、を、詔、へ、也、と、通、え、と
 也、
 徑、と、詔、ひ、長、と、紹、へ、る、然、ま、む、日、前、固、懸、二、大、神、の、御、也、
 小、心、を、著、て、考、ふ、お、し、

伊勢大御神の御とテ也。少チく坐マひタと。本文フ。少シ不合ハ意イ。
と何ナニ依ヨり合アせて思オモひ辨ワべし。但レし御記ミカキ文フ。一ヒト所トコロのミみ
通スまる御文ミカキあり。其レ一ヒト所トコロ鏡カガミの下シタのミみ。紀伊キイ國クニ御神ミカミ云フ
云フと何ナニの御文ミカキの二ニ所トコロの神鏡カガミ。已ニとる御文ミカキあるを思オモひ
合アせて辨ワべし。了マて思オモ所トコロ此コノ神鏡カガミの。加カく三ミ所トコロ坐マひタを以モて。此
時トキ鑄ツ給ルへる御鏡カガミの。去サれて三ミ面ツありしキ。去サるも曉サて
と。故レこの史シ。初ハジメ度タビ所トコロ造ツ之ノ。二ニ面ツ者モノ少シ。而シテ云フく。やレ文フを成ル
せり。次ツギ度タビ所トコロ造ツ之ノ。八ヤチ咫ツチ鏡カガミと。も三ミ面ツあり。二ニ十ジュウ二ニ社ツカ注ツ式シキ
小コ大御神オホミカミ此コノ御同ミカミ躰ミカミの神カミを記シせる。処トコロ。廣田ヒロタ日ヒ前マエ神社ツカ國クニ
懸ケ神社ツカを舉ツり。よレまレて。も初ハジメ度タビ小コ鑄ツとる鏡カガミの。二ニ面ツ小コ
て。日ヒ前マエ國クニ懸ケの御形ミカミ。此コノ二ニ面ツ。了マて神宮記ミヤノキ。あハ此コノ書シ神宮
の御鏡カガミ。小コ坐マひタこと知チられと。已ニと。了マて神宮記ミヤノキ。あハ此コノ書シ神宮
に。小コ上ウり記シせる。寛弘二年十一月十五日の内裡燒ウ之ノ間マ不被レ燒ヤ
の事を録ルして。天徳四年以來。度々内裡燒ウ之ノ間マ不被レ燒ヤ。

給ル内侍所神鏡。今度燒ヤ之ノ。被レ燒ヤ損ハ給ル。依ツ茲コノ件ツキ神鏡カガミ可キ被レ奉ル鑄ツ
替カ之ノ由ユ。被レ行ハ陳チ定テイ。且ツ被レ卜ウ筮シ吉キチ凶クワ。神祇官ミカミ陰陽寮インヤウソウ并ニ諸道博
士等シ。公卿キウケイ僉議ケンギ之間ノ。各オノ勘カン奏ソウ云フ。件ツキ神鏡カガミ者モノ。是非シ人間之所トコロ爲ス。
天地開闢テノチ之ノ初ハジメ。於ケ高天原タカマノハラ。鏡カガミ作ツ。遠祖トホソ天香山命アメノカミ乃ハ。八百五
皇神達ミカミ共爾ニ。以ツ銅鑄造ツ之神鏡カガミ也ナリ。以上イの文フ。神宮諸雜事ミヤノシ小
るも有アる。今イマこれノを校ツ正スして引ヒけ。○さて此文コノ。内侍
所トコロの神鏡カガミを直ナ高天原タカマノハラ。よレて造ツれる物モノのごと云フ。内侍
神天皇ミカミ御世ミカミ。造ツれ。後ノチ事を本ホ。免メぐらして。内侍所トコロの
神鏡カガミをよレとみよレる言コト。して。事コト。實マコトを誤アれ。依ツり。非シ空
公卿キウケイ諸道シヨウの博士フシ等トの勘カン。了マて。此コノ等トの重オモシ事コトを誤アるべシき。う
を。と。思オモへし。但レし。此コノ間マ。件ツキ。神鏡カガミ元ハジメ。三ミ面ツ也ナリ。廣ヒロ皆ミ方カタ尺シユ。而シテ
一ヒト面ツ坐マ伊勢國イセクニ。一ヒト面ツ坐マ紀伊國キイクニ。一ヒト面ツ坐マ内侍所ミカミ。是コノ件ツキ。鏡カガミ也ナリ。具ツク
見ミ于ケ日本紀ニッポンキ。と云フ。文フの有アる。後ノチの。も。此コノ知チら。然シテ。人ヒトの書シ加カ
と。此コノ文フ。亦モ云フ。炳ヒ焉ニ。其レハ。上ウ。小コ信シ友トモ。引ヒ。依ツ。古コノ書シ。と。も
小コ此コノ三ミ所トコロの神鏡カガミの御形ミカミの大小オホコト。具ツク。小コ見ミえ。と。る。を。此コノ時トキ

故其伊斯許理度賣命亦名天

○古史傳九

○五五

正躰を納奉る御槿代深一尺四寸内徑一尺六寸三分と
 ありさて御槿代内の御形容を既み由縁ありて秘し御
 傳するやう御槿代此中黄金の函の今を二ありて御
 正躰を往古より袋に納安置奉れるを遷宮の度おとさ
 新しき袋を調りて旧の袋のまよて納奉る例ありさ
 れど何れより重の高くあり給へむ近ごろハ己前の一
 と取替奉る
 事をおまて
 とぞ何れ
 のしあ

巴降巴給予る儘ふ變巴給ふこと無く常しへふ天壤と
 共小窮巴無く渡らせ給予る最も尊くいとも有難き
 御事よあそ穴がしあ。○延暦の内宮儀式延喜の大御宮
 式おとよ記されと大御神此御

の公卿博士とちの知まざることの有べきやを然るを
 方皆尺而云くと云るて後人の加とる文あゆこと論
 あり殊み具見于日本紀と云依おとる餘れ安事あり
 まと件神鏡元三面也やハ今ハ一面ありと云る文ふて
 事実み符をばさるを上み引る小右記の文みて此以之
 時三所恐所坐ませる趣いと著明きも此をや
 謂之件神鏡改而被奉鑄替之事未分明也。縦件御鏡雖被
 燒損給尤可被奉鎮安置於本所也者仍元神鏡御坐也と
 あり。まと同十二年十二月十四日公卿勅使參宮參議左大辨
 從三位藤原朝臣行成大中臣忌部十部等也。是内裡
 燒込之時神鏡被燒損給事所被。此了て御擬造の神鏡此
 謝申也とあり。因み記し出給。寛弘の度小燒損を給予依後の事を知られと巴。まとは
 の事ハ崇神天皇卷六阿那うしあ。はて右小引替て伊須
 年此処み委く注べし。受能宮小鎮座坐伏。大御神の本於大御鏡の天津御固と

カグヤマノミコトハ アマテルクニテルヒコホ アカリノミコト
香山命者。天照圀照彦火明命

亦^{マタノ}名^{ミナハ}天^{アメノ}ノ^{ミコ}出^カ兒^{ミツクリノ}鏡^{ミヤツコ}作^{ミツ}造^{レノ}水^{アタヘ}主^ム直^ム六^ム
糠^{ヌカ}戸^{ドノ}神^{カミ}。

ト^{ベノ}ムラジイ^ホキ^{ベノ}ムラジイ^{フク}ベノ^{ムラジ}
人部連。五百木部連。伊福部連。

ヒノクマトネリノムラジ^{タケ}タノムラシ^{タケ}タカハ^{ベノ}
檜前舍人連。竹田連。竹田川邊

ムラジ^{フエ}フキノムラジ^ラガ^{オヤナリ}
連。笛吹連等出祖也。

伊斯許理度賣命。名義師說ふ。伊斯許理也。初度了鑄ある
鏡也。意小合を交とて。鑄改^スあるを思ふ了。鑄重^{イシキ}の義あら
む。凡て事の重あるを志伎留と云重播^{シキ}重浪^{ナミ}お^{シキ}重^{シキ}を。斯
許理と云る例也。万葉十二ふ。志^シ意^イや更^シく思^シ許理^{コリ}來^コ免^メや
も。重^{シキ}將^シ來^メと詠^シ正^シと^シめり。鑄作^シと^シといふ説^シふ依^シと^シら
む。此説^シふ從^シふ^シばし。ま^シと己^シが打^シ鍛^シと^シて云^シ説^シふ依^シを^シあ
む。バ。書紀^シの石^シ疑^シと^シ作^シれ^シる^シ字^シの意^シふ^シて。質^シ石^シの上^シよ^シて。
鍛^シひ^シ疑^シと^シる^シ義^シあら^シむ。許^シ良^シ斯^シ也。許理^シと^シ約^シまる^シ。今^シ世^シ鍛^シ
を^シ許^シ呂^シ須^シと^シ云^シも。疑^シも^シて^シ同^シ言^シある^シべし。疑^シを^シ許^シ呂^シと^シも^シ云^シ
る^シ例^シ也。姓^シ氏^シ録^シに^シ建^シ許^シ呂^シ命^シ此^シ許^シ呂^シを^シ疑^シと^シ作^シ也。於^シ能^シ碁^シ呂^シ
島^シの碁^シ呂^シを^シ私^シ記^シに^シ疑^シと^シめ^シる^シ物^シを^シ打^シひ^シし^シぎ^シて。活^シう^シ處^シ疑^シ也^シと^シ許^シ
呂^シ須^シと^シ云^シも。生^シ活^シき^シと^シる^シ物^シを^シ打^シひ^シし^シぎ^シて。活^シう^シ處^シ疑^シ也^シと^シ許^シ

正云、るからむ。○此、み就て又按ふ。假言、志こり。志こ
る。あといふ言も、石疑の伊を省ける言ある。ほし。其、た男
女の中らひみ、甚く思ひ相とるを、もいひ。ま、と物の一、所
み寄りて、堅は、正とる。あ、とを、も云、む。あり。然れ、む。万葉、み。
思許理と詠るも、今、世、み、男女の、甚く思ひ、度賣、此、義、た。師
入、とるを、云、と、同じ、の、ら、む、も、知、べ、の、ら、び、度賣、此、義、た。師
み、老、女、多、云、稱、を、見、え、て、書、紀、み、姥、と、書、り、此、字、書、る、老
母、也、と、有、り、例、を、古、事、記、み、春、日、建、國、戸、目、沙、本、大、間、見、戸
賣、志、理、都、紀、斗、賣、あ、ど、何、り、ま、と、戸、辺、と、も、通、ハ、し、云、こ、と、
書、紀、り、石、疑、戸、辺、と、も、有、り、ま、と、戸、辺、と、も、通、ハ、し、云、こ、と、
ま、と、れ、ど、此、神、を、決、め、て、女、神、り、た、非、ざ、り、り、凡、て、斗、米、
ま、多、斗、辨、あ、ど、名、み、負、る、を、む、み、あ、女、神、の、如、く、師、を、云、ま
於、ま、ど、然、み、た、非、婆、旧、を、女、男、と、も、み、云、る、稱、あ、り、其、由、を、
神、武、天、皇、卷、名、草、戸、畔、と、云、名、の、処、り、委、く、云、べ、し、古、事、記
み、女、の、假、字、み、用、ふ、賣、字、を、書、き、書、紀、み、姥、字、を、書、る、み、泥
べ、き、み、非、婆、此、を、斗、米、と、い、ひ、斗、辨、と、云、字、女、み、の、み、稱、こ
と、く、あ、ま、る、後、世、意、の、利、所、見、ふ、て、御、鏡、の、光、の、利、く、所、見
所、為、と、あ、そ、お、ち、ぬ、れ、利、所、見、ふ、て、御、鏡、の、光、の、利、く、所、見
と、る、由、あ、ら、む、ら、む、。然、も、あ、ら、む、度、を、清、て、稱、ふ、ほ、し、。さ、て、美

と約まる。目を米と云も所見あり。ま、と、此、み、就、て、思、ふ、
鏡、乃、と、刀、あ、ど、を、磨、あ、ま、を、登、岐、登、具、と、云、も、本、を、登、伎、登、
久、と、清、音、み、云、ひ、て、利、は、る、由、の、活、き、語、あ、る、べ、し、今、世、み、
を、利、を、い、へ、バ、刀、あ、ど、の、と、く、切、る、由、を、の、み、云、ふ、言、と、
あ、ま、く、ど、語、の、本、を、光、る、由、と、き、こ、ゆ、さ、て、刀、あ、ど、も、と、く、
研、て、光、る、を、能、く、切、ゆ、故、み、自、み、切、ゆ、事、み、專、い、ふ、言、を、
あり、み、ら、む、又、速、こ、と、字、ト、レ、と、云、も、同、言、の、活、る、あ、り、
又、金、物、を、磨、ぐ、石、を、登、や、云、も、利、を、さ、る、り、出、て、同、言、れ、り、
下、み、引、流、書、等、み、此、神、の、子、孫、み、男、と、あ、て、斗、米、を、ふ、名、を、
負、る、ぐ、多、う、る、を、。所以、何、る、事、あ、り、。其、元、天、研、目、命、建、刀、米、
の、孫、あ、る、を、思、ま、と、神、武、天、皇、卷、み、大、久、米、命、此、目、の、大、あ、
ひ、合、ま、ほ、し、。ま、と、神、武、天、皇、卷、み、大、久、米、命、此、目、の、大、あ、
流、字、佐、那、流、斗、米、と、云、る、ま、や、何、り、。利、此、み、據、ま、バ、直、
み、此、神、の、御、目、此、利、き、由、あ、ら、む、も、知、ほ、ら、ま、。其、上、み、
命、此、名、義、を、解、る、処、に、注、○天、香、山、命、此、を、伊、斯、許、理、度、賣、
る、考、を、思、ひ、合、ま、ほ、し、。注、○天、香、山、命、此、を、伊、斯、許、理、度、賣、

命此亦名ある由也。上小引る。神宮記の勘奏文。鏡作大
祖を。伊斯許理度賣命と言ひて。天香山命と云。依りて曉
べし。此傳ハ。仮字日本紀の傳あるベ
き。よと。上よ委く論へるを思ふ。然るを。別神の如く
傳。とる説の多り依り。名此替れ依り依てあり。そを次く
よ云を見
て知名義香山小由れるよとを灼ものうら。其を名り負
坐る事ハ。いまと思ひ得ざるを。試ふ言を。彼山を。火神
の御體此化まる山あまむ。殊小火氣此炫れべき謂ある
を思ふ。彼御鏡の。太じく光に坐るを。正負依り名れらむ
り。前小を御鏡を造れる鏡を。香山より取まる謂。よ因れ
る名あらむと思ひしうと。香山よ正取れるを。鏡小限
ら。祓む。然○天照罔照日子火明命。此神の天香山命
小ハ。あらじ。

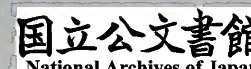
の御父小坐よとは。上小出於。第三十七段
合せ考べし。名義。よまも鏡
小由る御名あり。其ままづ。天照大御神。石屋戸を刺て
隱坐しうば。天上も罔土も。常闇と爲れるよと。上小見と
依り如くあるよ。此命此御子。天香山命の作れる鏡を。大
御神此大御光小似せ奉り。その己命と等き神の坐まり
と奇み所思看さし。受て。招奉らむ料小。造れる御鏡あり
まむ。太じく光ゆけむよと知はし。まよ其時の宇受賣
命の言。勝。汝。命。而
貴神坐りて奏し。大御神の其を御覽し。奇し。み給へる御有状を思ふ。法し。斯て大御神。石屋
戸を出御まむ。高天原も葦原中罔も。復照明くあまる
小依り。其鏡を天照罔照と稱。とる號あるべし。さて其を

造れる神の功字。其父の名三ナ係カケて。かく負せ扱るあらむ。
ま三ナと若くは。彼御鏡を直ミ此神の造ミ給ひらむも知べ
うらま。其を書紀に。鏡作遠祖天。拔戸兒石凝戸辺所作。八
咫鏡とも。鏡作部遠祖糠戸者造鏡とも有て。御父
子の間まぐひ扱る事も有げし。聞ゆまハあ也。あほ言
はぐ。釋紀に引る大倭本紀の注に。伊勢大御神の御靈實
此御鏡を天懸神と稱し。木国大神の御を国懸神と稱也
と。此全文を。第百三十四段に。見とる。我思ふ。懸ハ借
引て。其処に委く云べし。字ふて。炫カキと。同言ふれむ。此も天を炫カキりし。国を炫カキり。由
ち。依レあレと。炳シ焉シ。かくまハ。天照国照と。彼御鏡の稱號
ぬるコ也。彌ヨ著ア明キあ也。炫カキを。加賀とも。加具とも云て。常ふ
天迦久弓天。迦久矢天。迦久神。あどの。迦久も。同言ふて。清
音の久を書れど。ま三ナと。濁音の具をも書り。然まを。加くと。

清ても云ること知べし。故懸の字を借まる。あ依
べし。う三ナくて。加カく。須ス此。須スを。照シ此。須スと。同辞なり。ちて。火
明ホを。本阿加理と訓シ。能レを。読シ付ルる。を。已シろしと。師の言
ぬ。此も鏡の光れるを。火の如く。灼ヒく。明キき。意ハ取リて。稱メ美
と。依レあレる。は。師ハ。穂ホ赤アカ熟シ。此義ハ。糝シを。扱レれど。此神の名
信シが。と。し。但シし。ホホも。ヒヒも。打ヒ見ミまシる。やうの。意ハあり。穂帆
最シまシと。ホホい。おシあシど。云フホの。義ハを。思フふべし。然シまシハ。火を
穂と云まし。説クに。御鏡ハ光ル。此灼ヒり。志ハ意ハ。さて。香山命の
まを。叶フり。れど。赤アカ熟シの。義ハを。更シよ。由ルあし。本住ませ。依レ国ニ。尾張国ニ。造ルの。祖ハあレる。あレと。上
第三十 七段。ふ注る。如く。あレる。故ニ。彼国ニ。此神ヲ。由リ依レ社ノ
いと多クう。依レ。其ガ中ニ。神名式ニ。中嶋郡ニ。眞墨田神社ノ。名
大。仁明天皇紀ニ。承和十四年十一月。奉授ル。尾張国眞清田

神從五位下。文德天皇紀。仁壽元年十一月。詔尾張國眞清田神列於官社。同三年五月。從五位上眞清田神授從四位下。清和天皇紀。貞觀七年七月。授尾張國從四位上眞清田神正四位上。おど見也。當國の神名帳。正一位眞墨田大名神とあり。今松降庄と云。まて尾張大國靈神社あり。此在所を一宮村といふとぞ。此社。文德天皇紀。仁壽三年六月。以尾張國大國靈神列於官社と見也。當國此神名帳。正一位尾張大國靈大名社と申し。當國の國府宮あり。其帳考ふ云。此を國人吉見幸和説。眞墨田社を。一宮記。大已貴命と爲。とる。非あり。尾張氏の上祖。歷世當國。お住。し。う。む。其遠祖を祭れる社。三十餘座

あり。中。小。天照國照彥火明命。中嶋郡眞墨田神社。お祭。り。と。一宮と稱。天香山命。同郡尾張神社。お祭。り。と。云。ゆ。吉見氏。當國。お坐。東照宮の神主あり。今奉。と。る。説。其著。せる。宗廟社稷問答と云書。お記。して。元祿の頃。國の殿人天野信景等。國君の命を受。て。尾張國郡志を撰。む。と。お。自。他の祕書を。委。く。考。索。絶。て。記。せる。由。云。り。是。信。ふ。然。る。べ。し。け。る。を。眞。墨。を。御。紀。ふ。眞。清。と。作。家。を。思。ふ。此。を。彼。御。鏡。を。眞。清。鏡。と。も。稱。り。む。謂。ふ。依。て。神代紀。上。卷。一。書。り。白。銅。鏡。と。書。れ。し。を。狡。意。み。て。撰。ふ。足。ら。ぬ。と。此。を。ス。ミ。ノ。カ。バ。三。と。訓。る。ハ。眞。澄。鏡。と。云。事。ある。を。思。ふ。べ。し。其。を。造。れる。神。の。御。父。此。社。號。を。爲。り。む。か。し。上。お。辨。へ。國。照。と。負。坐。る。名。お。思。ひ。合。ま。べ。し。さ。て。香。山。命。を。尾。張。大。國。靈。神。と。稱。り。と。と。既。く。當。國。お。坐。して。國。造。ふ。功。德。の。有。け。む。故。ある。ば。



師説ふ何神まれ國を經ツ營ツまして功德あるを其國
國ミて國魂ミとも大國魂ミとも申して拜ツ記スるカ也故諸
國ミ某大國御王ミ神社と云
多しと云れトるガ如し。お布式ミ山田郡ミも尾張神
社ア也。當國の神名帳ミ從一位尾張天神トあり。此も香
山命ミを祀ツまスるコを疑フし。お不次クふサて火明命ミの亦
名ミを天糠戸神トとも申ス。此御名の義ミをいフるタ思ヒ得ズ。
神代紀ミ鏡作部遠祖天糠戸ミまト鏡作遠祖天拔戸兒石
凝戸邊ミおどあり。○鏡作造天武天皇紀ミ十二年十月鏡
作造賜姓曰連トとハ也。是ミを連トの加婆泥トとハまスるカり。
然ルを古事記ミ連トとハるカるカ師ト此言れトるカ如く誤ルを
む今ハ舊トふ就テ造セを奉ルおサて神代紀古語拾遺ミおどふ
ハミ鏡作トまト鏡作部トおどのみ有テ加
婆泥トを記スられザるハいウあるカ故トも也。さて師説ス。此

氏の事古語拾遺崇神天皇段ミ更令齋部率石凝姥神裔。
天目一箇神裔二氏更鑄鏡造トとハる。是ミふ其裔トのみ
云テ。姓ミをも其人の名ミをも舉ル。世トは史ミも此氏人ト
見えトるカと無キを思フ。甚ク衰ヘとルおサり。扱ル姓氏
録ミも載ラれル當時トをやク。此氏絶ルゆリしカも。最モ畏カシ
き大御神の御靈實トをしも造奉ルし神の子孫トかく絶ケ
むカとハ甚ク哀シきわガざリかシ。と言れルおサるカ信ス然ル
こトおサり。故篤胤トの學問ト入リし頃トをゆ。常ニ此事の心
を挂カて長息トはシく思フゆリしを神の定ミおサ給ヘるカ事
を悉ク今現レるカ依リ有テ其御定ミ此如くカらル終ニ無キ

故^{カレ}ふ常^{コキ}了^{コキ}その可畏^{カレ}を畏^{コキ}む心^{コキ}ふ。於^{カレ}ら^{コキ}く思^{コキ}子^{コキ}依^{コキ}事^{コキ}を。皇^{カレ}美^{コキ}麻^{コキ}命^{コキ}天^{コキ}降^{コキ}坐^{コキ}於^{コキ}時^{コキ}。天^{コキ}照^{コキ}大^{コキ}御^{コキ}神^{コキ}。産^{コキ}靈^{コキ}神^{コキ}の御^{コキ}量^{コキ}とし^{コキ}て。美^{コキ}麻^{コキ}命^{コキ}の大^{コキ}八^{コキ}嶋^{コキ}国^{コキ}所^{コキ}知^{コキ}看^{コキ}御^{コキ}政^{コキ}了^{コキ}。必^{コキ}無^{コキ}了^{コキ}。有^{コキ}ま^{コキ}心^{コキ}死^{コキ}事^{コキ}此^{コキ}限^{コキ}り^{コキ}を。漏^{コキ}る^{コキ}ま^{コキ}と無^{コキ}く。遺^{コキ}依^{コキ}く事^{コキ}亦^{コキ}く。任^{コキ}し降^{コキ}し給^{コキ}ひ。此^{コキ}を第^{コキ}百^{コキ}三^{コキ}十^{コキ}三^{コキ}段^{コキ}を^{コキ}り^{コキ}。次^{コキ}云^{コキ}ふを^{コキ}見^{コキ}て^{コキ}知^{コキ}る^{コキ}べ^{コキ}し。彼^{コキ}天^{コキ}降^{コキ}坐^{コキ}於^{コキ}時^{コキ}。大^{コキ}御^{コキ}神^{コキ}の御^{コキ}詔^{コキ}了^{コキ}。豐^{コキ}葦^{コキ}原^{コキ}中^{コキ}国^{コキ}を。吾^{コキ}御^{コキ}子^{コキ}の治^{コキ}に^{コキ}べき地^{コキ}亦^{コキ}。就^{コキ}坐^{コキ}了^{コキ}。所^{コキ}知^{コキ}看^{コキ}せ。寶^{コキ}祚^{コキ}の隆^{コキ}坐^{コキ}む^{コキ}こと。天^{コキ}壤^{コキ}の共^{コキ}無^{コキ}窮^{コキ}ある^{コキ}べ^{コキ}し。と^{コキ}言^{コキ}祝^{コキ}給^{コキ}ひ。ま^{コキ}る^{コキ}産^{コキ}靈^{コキ}大^{コキ}神^{コキ}を。諸^{コキ}部^{コキ}緒^{コキ}此^{コキ}神^{コキ}と^{コキ}ち^{コキ}ふ。其^{コキ}職^{コキ}亦^{コキ}仕^{コキ}奉^{コキ}了^{コキ}て。天^{コキ}上^{コキ}の儀^{コキ}亦^{コキ}如^{コキ}く^{コキ}せ^{コキ}と。御^{コキ}言^{コキ}依^{コキ}して。天^{コキ}降^{コキ}坐^{コキ}し^{コキ}於^{コキ}給^{コキ}へ^{コキ}る。其^{コキ}大^{コキ}詔^{コキ}命^{コキ}の^{コキ}は^{コキ}ふ^{コキ}く。皇^{コキ}美^{コキ}麻^{コキ}命^{コキ}の^{コキ}嗣^{コキ}く。一^{コキ}御^{コキ}世^{コキ}の

如^{コキ}く。大^{コキ}御^{コキ}世^{コキ}知^{コキ}看^{コキ}せ^{コキ}む。その^{コキ}み^{コキ}副^{コキ}て^{コキ}降^{コキ}ら^{コキ}る。神^{コキ}等^{コキ}の^{コキ}子^{コキ}孫^{コキ}も。共^{コキ}八^{コキ}十^{コキ}連^{コキ}亦^{コキ}續^{コキ}きて。奉^{コキ}仕^{コキ}る^{コキ}る^{コキ}事^{コキ}亦^{コキ}く。絶^{コキ}と^{コキ}り^{コキ}。げ^{コキ}亦^{コキ}る^{コキ}を。いと^{コキ}心^{コキ}得^{コキ}ぐ^{コキ}と^{コキ}く^{コキ}所^{コキ}思^{コキ}て。猶^{コキ}深^{コキ}く^{コキ}考^{コキ}と^{コキ}り^{コキ}し^{コキ}ら^{コキ}む。果^{コキ}して^{コキ}伊^{コキ}斯^{コキ}許^{コキ}理^{コキ}度^{コキ}賣^{コキ}命^{コキ}の^{コキ}子^{コキ}孫^{コキ}も。いと^{コキ}多^{コキ}く^{コキ}亦^{コキ}む^{コキ}有^{コキ}る^{コキ}。依^{コキ}其^{コキ}姓^{コキ}氏^{コキ}錄^{コキ}子^{コキ}。火^{コキ}明^{コキ}命^{コキ}之^{コキ}後^{コキ}と^{コキ}い^{コキ}ひ。天^{コキ}香^{コキ}山^{コキ}命^{コキ}之^{コキ}後^{コキ}と^{コキ}ある^{コキ}。諸^{コキ}氏^{コキ}此^{コキ}れ^{コキ}亦^{コキ}り。最^{コキ}も^{コキ}畏^{コキ}き^{コキ}大^{コキ}御^{コキ}神^{コキ}の^{コキ}御^{コキ}靈^{コキ}実^{コキ}と^{コキ}も^{コキ}亦^{コキ}ま^{コキ}依^{コキ}宝^{コキ}鏡^{コキ}を^{コキ}造^{コキ}り^{コキ}奉^{コキ}し^{コキ}神^{コキ}の^{コキ}子^{コキ}孫^{コキ}亦^{コキ}絶^{コキ}べ^{コキ}き^{コキ}謂^{コキ}ら^{コキ}め^{コキ}や^{コキ}も^{コキ}亦^{コキ}亦^{コキ}と^{コキ}ふ^{コキ}と。此^{コキ}證^{コキ}と^{コキ}も^{コキ}を^{コキ}師^{コキ}亦^{コキ}靈^{コキ}の^{コキ}天^{コキ}々^{コキ}け^{コキ}り^{コキ}。い^{コキ}う^{コキ}亦^{コキ}聞^{コキ}給^{コキ}ふ^{コキ}ら^{コキ}む^{コキ}。其^{コキ}を^{コキ}亦^{コキ}於^{コキ}上^{コキ}亦^{コキ}引^{コキ}れ^{コキ}る^{コキ}古^{コキ}語^{コキ}拾^{コキ}遺^{コキ}亦^{コキ}。唯^{コキ}其^{コキ}裔^{コキ}と^{コキ}のみ^{コキ}云^{コキ}て。姓^{コキ}を^{コキ}も。其^{コキ}人^{コキ}の^{コキ}名^{コキ}を^{コキ}亦^{コキ}舉^{コキ}ざる^{コキ}を^{コキ}以^{コキ}て。此^{コキ}氏^{コキ}の^{コキ}衰^{コキ}と^{コキ}る^{コキ}故^{コキ}と^{コキ}思^{コキ}ハ^{コキ}ま^{コキ}し^{コキ}ら^{コキ}む。拾^{コキ}遺^{コキ}の^{コキ}例^{コキ}と^{コキ}して。唯^{コキ}其^{コキ}祖^{コキ}亦^{コキ}名^{コキ}を^{コキ}亦^{コキ}舉^{コキ}て。當^{コキ}時^{コキ}此^{コキ}人^{コキ}の^{コキ}名^{コキ}を^{コキ}亦^{コキ}舉^{コキ}ざる^{コキ}ま^{コキ}と。此^{コキ}氏^{コキ}人^{コキ}亦^{コキ}限^{コキ}ら^{コキ}ば^{コキ}諸^{コキ}氏^{コキ}と^{コキ}亦^{コキ}然^{コキ}る

例あり。其のこの引まゝと依文。天目一箇命の裔をも其
人の上第三十九段に記せるを以て知ばし。目一箇命の子孫
如くいと多うる物をや。故に姓名を記さず依を。此氏の
衰とる證とを言ぐとくあむ。はと世々の史も。此氏人
の見ざ依事ハ。後ふ氏此稱の變ある故あるはし。出雲氏
氏とあり。まゝ菅原秋篠あ。師此歎。伊斯許理度賣命。や
どよ變とるをも思ふべし。考へ漏されし故ふぞ有る。
ぐて天香山命あるとを。考へ漏されし故ふぞ有る。
其在下ふ舉と依諸氏の下ふ。云ふを見て辨ふはし。○此
と密に思ふ由あり。其をもし信ふ。鏡作氏を項る家の他
氏も變て。其家の絶とらまし。うバ。姓氏録に載じて。火明
命の後と云。香山命の後と云。氏に六十家む。うちりも有
べし。此家々の存するを。何ほども有べし。ま。其の
人を選びて。鏡作連の復し給。む事。あ。そ。あ。ら。ま。不。し。ん。
ま。其。を。連。と。む。其。連。の。郡。主。と。る。由。あ。れ。バ。あ。り。大。氏。の。後

を小氏たり嗣る例。崇神天皇の御代。出雲國造。出雲
振根を誅して。其弟飯入根命。此子。宇加都久奴命。を出雲
國造。此鏡作氏。限らぬ事。ぞ。う。し。け。て。和。名。抄。ふ。大。和。國
城上郡。鏡作。久利。都郷。何。也。此。師。を。加。く。の。下。ふ。美。字
省きても云。う。と。言。れ。し。ら。う。と。信。友。説。ふ。此。を。美。を。脱。せ
る。名。帳。に。非。也。其。を。文。明。十。一。年。の。古。本。に。東。大。寺。戒。檀。院。神
名。帳。に。鏡。作。大。明。神。を。加。二。ツ。ク。リ。と。坂。名。を。點。と。り。こ
ろ。カ。ツ。ク。リ。あ。る。多。し。然。れ。む。既。く。を。り。カ。ツ。ク。リ。と。あ。へ。と。る
あり。此。帳。か。く。る。例。多。し。加。賀。國。の。名。義。も。鏡。子。由。ある。地
名。に。是。就。て。又。思。ふ。多。く。有。て。毎。年。に。諸。國。へ。鏡。磨。の。出
る。を。思。ふ。と。云。ふ。然。る。言。ひ。て。鏡。の。名。義。を。炫。見。あ。れ
む。加。く。と。云。ふ。本。語。あ。り。美。都。久。里。と。何。り。加。く。都。久。理。加。く
ふ。鏡。作。郷。何。り。て。加。く。美。都。久。里。と。何。り。加。く。都。久。理。加。く
も。美。都。久。理。い。ぢ。ま。ふ。神。名。式。に。同。郡。に。鏡。作。坐。天。照。御。魂。神。
社。大。月。次。清。和。天。皇。紀。に。貞。觀。元。年。正。月。大。和。國。鏡。作。天。照
新。嘗。

御魂神授從五位上と見也。今八尾村社の傍に鏡池と云

と帳考鏡作伊多神社。鏡作麻氣神社。あど何也。師云或説

云云石凝姥命麻氣神社を天糠戸命を祭るを云るを古

き傳ある事よと云まとりいりも由何りて聞也麻

氣神社を今小坂村を云よ在てさて此天照御魂神やが

春日明神と称と帳考ふ云へ也。

て火明命ふ坐あや天照と云ひ鏡作ふ坐と云るふて炳

焉し。お不次くふ○水主直ミツシラノミチおを姓氏録す。山城国天孫

水主直火明命之後也と見え。天孫本紀よ。天火明命九世

孫。王勝山代根古命。山代水主雀部祖と有ふ依て載せ也。

水主を和名抄ふ。久世郡水主郷まをれ也。信友云加茂神

八月五日賀茂別雷神社領山城国水主郷と有り山城志よ

を廢郷部よ收まて今綴喜郡有水主村を云也さて今三

ツシと神名式ふ同郡よ。水主神社十座。並大月次新嘗就

魂神水主坐山背大國と見えある社を。水主直の祖神等

を祀れる社あるはし。仁明天皇紀ふ。承和十一年五月奉

授山城国水主神從五位下。清和天皇紀ふ。貞觀元年正月。

授從五位上。水主神等並從四位下。同八年十一月。授從四

位下水主神從四位上。あぞ見也。今大水主明神と申て靈

考よ云へりさて水主と云由を詳あらぬを少う思ひ帳

得つる説を有り垂仁天皇卷二十五年の処に注べし其

を水主神と云ふて知られとめ。中ふ天照御魂神と何る

は。疑あく火明命と通也。まゑ山背大國魂命と云を。山代

根古命あらむ。然るを。水主直の祖と何る此命の。山代

根古と名ふ負^{オヘ}る也。此圀の圀魂と稱^{イサ}べき布ど也。功德^{イサ}の

無らむ^ハ。負まじ^カ名^ナをま^マぢ^ル也。凡て某圀魂と云^クる

有りし神を云例^レを依^ルこと上^ニ云^フるが如^クし。凡^レて此社^ニ坐^スす

坐^スす。天照御魂神也。火明命あるべく所思^{オボユ}るふ就^キてお布

思ふふ。式^ノも。同圀葛野郡^ノ。木嶋坐天照御魂神社^ノ。名神大^ノ月次相

嘗^シ新^ニ嘗^シ。清和天皇紀^ノ。貞觀元年正月。木嶋坐天照御魂神正^ノ。

五位下と見也。今^ニ太^ニ秦^ノ村の東南^ニ在^リ。永万記^ノ。大和圀

城上郡^ノ。他田坐天照御魂神社^ノ。大月次相^ノ。清和天皇紀^ノ。

貞觀元年正月。他田天照御魂神從五位下と見也。今^ニハ春

とぞ。津圀嶋下郡^ノ。新屋坐天照御魂神社三座^ノ。並^ニ名神大^ノ月次新嘗^ノ。

就^テ中^ニ天照御魂^ノ神^ノ。預^ル相嘗^シ祭^ル。清和天皇紀^ノ。貞觀元年正月。從五位下勲

八等。新屋天照御魂神。從四位下と見也。此三座一座ハ西

座ハ福井村^ニ在^リ。一座ハ上河原村^ニ在^リ。福井村^ニ在^リ。一

座ハ今^ニは天王と稱^シ。上河原^ニ在^リ。今^ニは天照大神と稱^ス。

と帳考^ミ云^フ。天照と申^ス。とて日大神の御事^ヲせして

天照大神と思^ヒ混^ルとるあり。さる例^ノ下^ニも有^リ。其心^ヲし

て辨^ス。此等の御社も同^ニ神^ノれる也。其^レ津圀新屋^ノ也。和名

抄^シ。嶋上郡^ノ。新屋^ノ。夜^ノ。郷^ノ。又尾張圀海部郡^ノも。

新屋郡あり。此^レ海東郡^ノに屬^スて。新居屋村^ノといふ。當圀神

社帳^ニも。新屋神社といふ見^ユるを。圀人^ノに問^フへむ。天照大

神と申^ヒと云^フへ也。天照大神と云^フへど。火明命^ノあること疑^ハる。然^レも津圀

ある。天照御魂神也。もぞ此地^ヲより移^ワせる故^ニ。尾張の地

名を社號ナ負ヘる依レべし。尾張に此神の本居坐し因あ
ること上云るを思ひ合ハ
べし。まと和名抄子伊豆因田方郡ま鏡
作郷新居郷あり由ある事あるカレ上件木
嶋他田此二社不坐まは。天照御魂神と申レも。火明命あ
るはきあと。準ナ子テ悟ルべし。此を何も其地くふ。其御ス齋ス
此氏人の住るをめ祭り來おるふぞ有るき。此例いと多
くは姓氏録
み。大和因津因共し。火明命の御齋を多く載られ。和名抄
みも。此氏人子由ある地名を大和子も津因も多く見
る。○六人部連古を姓氏録山城因天孫不六人部連火明
命之後也。まと津因天孫子六人部連火明命五世孫建刀
米命之後也。あど有ふ依て載セ也。まと右京天孫子六人
部火明命五世孫武砥
目命之後也。扱河内因天孫不身人部連火明命之後也と
ともある也。

見え。天孫本紀不天戸目命子建斗米命次妙斗米命六人部連
等。建手和邇命身人部連等祖。とあまバ六人部身人部ハ同古と
みる。本を美斗倍を云ハむを牟斗倍とも云ハる不依て六
人部とも書けむと所思と也。身を牟を云ハハ
常のことあり其を神鳳抄
不。尾張因不三人部御園といふ見ぬれ也。此氏を此地名
を負るあらむと所思レバあり。けて清和天皇紀不貞觀
四年五月の下不美濃因厚見郡人六人部重成賜姓善淵
朝臣と見え。同八年七月の下不美濃因各務郡大領各務
吉雄厚見郡大領各務吉宗あとある也。和名抄子各務郷も
ありて各務郡厚見
郡と並びと也。此を思ふる六人部各務ハ同祖不て尾張因と也。

此圀ヲ移住依ありん^レ也。美濃と尾張ハ古と後とハいと
ど考ふるもハ混^レらハしき事多^ク故神名式子各務郡^ノ村
と其圀人等既^ニ云へりき。圀眞墨田神社^{あり}也。ま^と同郡^ノ村圀神社^と云も式^子載
慶雲四年の処聖武天皇紀天^平十二年^ハ下^ニ文武天皇紀
圀村圀連といふ氏人の見え^とる^ハ同流^ノ裔^ハる^ベし
然れ^ド郡名^ハ各務^ハ鏡の由^ハある^ハと灼^クは^と氏の各
務^ハ。や^グて鏡の借字^{あり}ん^レ也。然れ^ドま^と伊^斯許^理度
賣^天香山。一神^ハ御名^ハふ^て火^明命^ハ御子^{あり}證^の殊^ハ
著^明ある^{もの}ぞ。さて美濃と尾張^とを古^くを^一圀^ハお
と聞^ゆれ^ド其移^住る^もい^ちぢ^とり^を云^こと^ハ外^レく^此處^ハ
も彼處^も其氏^人ハ^已ぐ^むき^く住^々終^と美濃^の地

ふ住^らる^おとの史^ハ見^と依^を。景行天皇紀二十七年の
下^ニ日本武尊^ハ熊襲^{を取}り^往坐^る時^ニ。美濃圀^ハ善射^者
者^弟彦^公と云^を召^て。御供^ハ連^とる^ハへ^依事^{あり}也。此^はと
皇^卷委^く。此^を天孫本紀^ヲ考^るふ^ハ弟彦^公を^火明^命十
注^ふべ^し。四世孫^尾治^弟彦^連と^いふ^ハ。即^チ是^ハあ^まむ^此人^の時^をり^以
前^の事^とは^知ら^ぬあ^らず^也。かく^て姓^氏録^ハ載^れる^右京^ハ
美濃^をり^移り^住る^もて^清和^天皇^紀見^とる^ハ六^人部^氏ハ
各務^の氏^人を^其圀^ハ残^るる^裔の^氏人^{あり}む^りし^也。
て和名抄^ハ丹波圀^天田^郡六^部郷^{あり}也。上^田百^樹云^當
當郡^ハ六^人部^と云^見え^ハ四^輩順^拜圀^繪
み^も丹^州六^人部^をい^ふ見^えと^りと^云ゆ^也。此^ハ此^氏人^ハ
由^何也^と號^とる^地名^{あり}あ^と灼^し。ま^と同^郡ハ^雀部^郷
と云^もあり^水主^直

の処ト引ル。天孫本紀の文を考ふべし。此も由ル地ノ絡ルあり。百樹云。村名帳ニ雀部村トありと云リ。さて隣郡何鹿郡ヲ賀美ニ其レ神名式ニ同郡ニ天照王命神社トあり。此郷モあり。疑ハ火明命ニあるレ。思フ所ニ思フふ就テ考ル。丹波国造ハ尾張国造ト同祖ニて。建稻種命ノ後ニあり。由見えト也。此国造ノ事ハ成務天皇ノ卷ニ此命ニ火明命ノ十二年ノ孫ト天孫本紀ニ見エるレ。思フ合ス。然れニ。天照王命ニ云ハ。火明命ニ違ヒ有ルまじくトこそ。此神名ノ玉ハ三々ト訓ベし。其レ上ニ挙ト。さて信友云。伊勢国ニ朝明郡ニ鷓村ニ齋宮ノ跡ニあり。其邊ニ六人部出ト云ハ。此とぞ。神名式ニ多氣郡ニ天香山神社トあり。此も由ルある

事ル。五百木部連ト。河内国天孫ニ。五百木部連ト。火明命ノ後ニ也。と見え。今本連ノ字ヲ脱セ也。今一本ニありて補ヘ。天孫本紀ニ。火明命ノ九世孫ニ。弟彦命ノ子ニ。王勝山代根古命ト。此山城ニ水主ニ。直雀部連等ノ祖トあり。此弟ニ若都保命ト云ハ。五百木部連ノ祖ト有ル。依テ載セ也。此氏人ノ始ニありて見え。是は雄略天皇紀ニ。三年四月ニ。下ニ。廬城部連ト。枳莒喻ト。いふ人ノ子ニ。武彦ト云ハ。見え。廬城ト作ル。字ヲ異ス。れども。云ハ。此人ニ。栲幡皇女ニ。奸ト也。と譖ラ。またりし。其父ノ事トして。武彦ニ。廬城河ニいふ河ニ。鵜ヲ使ヒ魚ヲ捕シ。て殺ス。る事トあり。その廬城河ト云ハ。仁徳天皇紀

四十年の下ふ。隼別皇子と。嶋鳥皇女とを。伊勢の蔭代野
みて。弒せ奉りて。其屍を。廬城河邊に埋納する由見えぬ
れど。伊勢国に在る河あり。然まば此河の名を。氏と爲と
承からむ。と思ふ。然らば。其在安閑天皇紀。元年十二月
に下ふ。廬城部連。枳莒。其の女。幡媛。其罪を贖ふと爲て。
安藝国過戸。廬城部。屯倉を獻れる事見えと。然れど安
藝国の人あり。雄略天皇の三年と。此御世の元年
に。既年長と。子を持し。七十六年。やあらむ。彼二年
代。百歳を多く越と。人あり。和名抄ふ。同国佐
伯郡。伊福郷あり。此本居の地ある。然るを。淳和
天皇紀。天長十年十月の下ふ。安藝国佐伯郡。伊福部。五百

足といふ人見えぬを思ふ。此枳莒媛が末あるべ
く思ふ。殊に伊福を。廬城の轉語。同氏あり。下
ふ委く注に如く。廬城河といふ名を。雄略天皇の
御世に。廬城部。武彦を殺と。依河ある。負る名。却
て末あり。所思と。然るに。徳天皇紀。既く此河
の名を始。及不して。語傳へ。伊福部。連。其後
例多。事あり。お次。注。ふを見。○伊福部。連。其
姓氏録。左京。天孫。伊福部。宿禰。尾張。連。同祖。火明。命。之。後
也。と有。依て載せ。伊福部。連。と。山城。国。
天孫。ハ。唯。伊。福。部。と。も。あり。天武天皇紀。十三年十二月の下ふ。伊福
部。連。賜。姓。曰。宿禰。と。見。也。舊。上。見。え。る。如。く。廬。城。と
云。を。此。御。世。の。頃。ハ。既。子

伊福と云ハしハかり其ニ上ニ引ル雄略天皇紀安閑天皇紀おハぞハ連ト有テ此ハ伊福部連賜姓曰宿禰ト有ル小辨ハふベし然レハ此御世ト也宿禰ノ加婆泥ト也ハ也ハ故レ此ハ小ハたハ舊ハよト但シ其ニ其家ハくハ小ハ悉ク賜ヘ依ハ小ハ也ハ漏ト依モ有シうラ姓氏録ハ連ルも唯伊福部ハ有ルも有ル也ハいハと多クりハて伊福ハ和名抄ハ備前国御野郡遠江国引佐郡おどハ伊福郷ハ也ハ以布久と訓ヲ加ヘ也ハ此ハ依テ訓ベしハあハ不レ諸国ハ伊福トいハふと扱ト同抄ハ播磨国揖保郡揖保ハ伊比郷あり同国同郡也揖保坐天照神社ハ名神大ハ神名式ハ載レされハ清和天皇紀貞觀元年正月播磨国從五位下勲八等粒坐天照神

從四位下と見也ハさて御紀ハ揖保ハ粒ハ字ハを書れハとハを書りハ神名式ハ一本ハ粒ハと作るハも有レとハ臨時祭式ハも粒ハ字ハおどハ依リてハ後人ノさハうハしハらハ有ルべシ諸本ハ揖保トありハ扱ハ此社ハ今揖保郡関村ト云ハ有レ也ハ今ハ伊勢宮ト稱ハひハ帳考ハいハへリあハたハ天照神ト稱ハひハ依テ日大御神ト思ハひハ混ヘ上マるハありハ此社ハ祭ル神ハも疑ハふハ火明命ハ有ルべクたハ不ハ也ハ其ハ清和天皇紀四年ノ下ハ播磨国揖保郡人雅樂笛生無位伊福部貞復本姓五百木部連火明命之後也ハとハあハまハバハありハ又ハ此ハ依テ按ハ小伊福五百木ハ同言ノ稍轉マるハ小借レるハ假字ハ也ハ共ハ氣吹ノ義ハありハを舊ハ伊保伎ト云ハ也ハ伊布久トも云ハるハ依テ伊福字ハを書るハを此時ハ舊ノ如ク五百木ハ唱ハふハ法ハきハ由ハを命セ給ヘるハ字ハ

復本姓とハ云依あり。吹を吹久と活りし云を常あるを
玉ともある。さて氣吹と云。笛吹小依まゐる氏あらむ。御紀
みて知べし。有。楽笛生云くと有。かくて伊福と云地名の多うる中。小尾
張。因海部郡ある伊福郷。本あるはくおふ也。此も和名抄
神鳳抄。伊福部御厨とある也。此地ある。ま。其尾
火明命の裔。尾張連海部直の有をも思ふべし。其尾
張也。火明命香山命の本居。此因をまむ也。景行天皇御
子五百木之入日子命。五百木之入日賣命。共み尾張因小
て生坐るをも。思ひ合まべし。此事景行天皇卷よ。委く注を見るべし。さて播
磨。因揖保の地名也。五百木部の住る。因て。號於る。あら
む。此氏人。小縁ありて号くる事。い。多も更あり。其信友

説ふ。揖保也。拾芥抄。小も揖穂と作れど。古く伊保とも云
牙ゆ。然るハ。新續古今集。い。布の湊よ。千鳥の鳴を死
死。大江嘉言。淡き夜。了。祢さ。免て。きけ。む。播磨。ぐ。い。布
の湊。小。千鳥。鳴。あ。也。と詠。依。ふ。て。知。る。べ。し。伊保を伊比保
字鏡。み。疵。を。伊。比。保。や。何。る。を。字。と云るハ。新撰
類抄。ハ。伊保。とも。ある。例。あり。とい。牙。ゆ。然。れ。む。揖。保。伊
と云地名也。伊富を延て云る。依。こ。や。疑。あ。し。さて。五
百木氏也。尾張連。と。り。別。也。て。安藝。播磨。左。右。京。大。和。山。城。
河内。あ。ど。も。住。み。後。小。大。加。多。也。伊。福。部。と。云。也。し。中。小。
河内。因。の。む。か。也。也。舊。の。ま。く。五。百。木。部。を。唱。へ。と。る。か。ら。
姓氏録。も。あ。り。載。さ。れ。る。あ。也。也。け。り。神。名。式。も。當。因。の。若

江郡ふ意伎部神社也。河内志よ所在不詳といへり此を内山眞龍説ふ。意を五百の約れるふて。五百木部神社あらむと云へり。此ハ然も有べし。○檜前舍人連。去て姓氏録。左京天孫部ふ。檜前舍人連。火明命十四世孫。波利那乃連公之後也。を有よとて載せ也。天孫本紀よ。火明命十四世孫。去てをち上ふ引る。弟彦連の弟よ。尾張針名根連とある。即此人と聞也。世數もよく符り。天武天皇紀ふ。十二年九月。檜隈舍人造賜姓曰連と見えて。本を造の加婆泥おゆき。檜前を。和名抄ふ。大和国高市郡よ。檜前比乃久末とある郷是也。宣化天皇紀ふ。檜前庵入野宮。言の意を。木国の日前とある也。此地よ在し宮あり。と同義よて。此も鏡る依まる稱の地名よあまる也。依る也。

志。さる例い。ちて波利那連公の名義を思ふよ。決あく尾張と多り也。ちて波利那連公の名義を思ふよ。決あく尾張と多り也。此地よ移れる也。尾張ハ其本国ある也。其を天孫本紀了。此を尾治針名根連といひ。神名式ふ。愛智郡ふ。針名神社も有れおあり。式よ備前国御野郡よ。尾針神社。尾治針名眞若比女神社。あど何也。和名抄ふ。同郡よ。伊福郷あり。邑久郡よ。伊尾張郷も有り。其他の氏よ由ある地名ども。此固ふ彼此見えとあり。ちて稱徳天皇紀。神護景雲元年九月の處よ。上總国海上郡人。檜前舍人。直建麻呂。賜上總宿禰と見え。和名抄ふ。同国武射郡よ。新居新屋あどいふ郷名ある也。由あることある。仁明天皇紀。承和七年十二月の處ふ。武藏国加美郡人。檜前舍人。直由加麻呂等。男女十人。貫附左京六條と見

也。和名抄み同固荏原郡み。覺志加之と云る郷あり。燃の義々。まと榛沢郡み。新居郷と云もあり。由ある事あり。さて加美郡と云郡名も必鏡をり出於らむ。故カ。三と訓於凡て諸固み加美てふ地名多し此を上下と對へる地名あきハ大抵鏡み由ありる地名と聞えり心を著て考ふべし各務と書る地名を云も更あり。然れむ此氏人ハもと尾張をゆ移して大和固高市に在み檜前を氏と爲すむぐ。まと東固に移り住してを。此時召まぬるれ也。故姓氏錄み左京み。○竹田連此を姓氏錄左京天孫部み。竹田連火明命五世孫建刀米命之男武田折命景行天皇御世擬殖賜田夜宿之間箇生其田此田の在し市郡ありんむこと次。天皇聞食而賜姓箇田連と有小依ゆて載せ也天孫本紀みも火明命五世孫建斗米命子建多乎利命竹田連等祖とあり。竹田を本す。箇

み誤れるを今改て引てまと姓氏錄今本み湯母竹田連と何まど湯母を行あり。今を古本み無小をまり。ちて箇を竹の借字あり。其を次に引く文を。供御箸竹と有る小依を知べし箇の一夜に生出む事ハ何竹田と負は本義をく聞えと也。○竹田川邊連は姓氏錄左京に竹田川邊連火明命五世之後也此を上小見とる武田折仁德天皇御世大和固十市郡刑坂川之邊有竹田神社因以爲氏神同居住焉。綠竹大美供御箸因茲賜竹田川邊連と有小依を載せり此を上小舉とる。竹田の氏上小て有けむぐ。其を竹田神社ハ彼田に竹の生とる故に祭とる社命を云名を竹田刑坂川之邊に住て仁德天皇の御世に居る義ありべし。

御箸を供タマフまゐるに依て。川邊てふ言を復カキ祿て賜へる由あり。神名式に。十市郡竹田神社とあり。即チ是チあるべし。今竹田村
と云さて其祭神を香山命を祭まゐるあらむ。此神は竹とぞ
に由あること。下第五十二段波波く迦カの処。小注を見よ。○笛吹連。古に
姓氏録河内国に。笛吹連。火明命之後也。と有るにりて載
せに。神名式大和国添上郡に。笛吹神社あり。諸本に。穴吹
れり。今ハ度會延佳の旧事紀頭注。此に笛吹氏より由ある
に引るに。笛吹神社と有るにり。伊福部貞とあるに。由ある事あり。氏に。笛吹と負
社あり。上上引る清和天皇紀に。雅樂笛生。氏に。笛吹と負
る由も何も。下第五十二段波波く迦カの処。小注を見よ。○此外に。
姓氏録に。河内国に。尾張連。吹田連。身人部連。五百木部連。

若犬養。丹比連。おど。火明命の裔ミエ比氏人ら多く住に。さて
丹比郡あり。郷名にも。河内郡古市郡に。新居志紀郡に。新
家。此に今丹比郡大縣郡。澁川郡に。賀美おど見よ。とあり。郷名
を悉トクく由有ておぼゆるに。就て按オモふに。神名式に。高安郡
に。天照大神。高座神社二座とあり。社も。疑なく火明命。香
山命を祀イタまゐるからむを。知れに。其に舊事紀に。天照国
照彦火明命と。櫛玉饒速日命とを一神とし。香山命と。高
倉下クラジとを一神を爲とるに。附會ツケアハセとるからむ。を師を云クま
ふれど。熟思コトへむ。此に信に疑なき事なり。此こと。神武
日命の下に。委オモく注。此社を。火明命と。香山命亦名高倉下命と。二
を待て見るべし。

座を齋ヒとるハ違ヒ有まじくこト也。猶思ひ合ハべき事ハ。陽
成天皇紀。元慶元年十二月ハ下ニ。筑前ノ圀正六位上天照
神ニ從五位下ト。と見ユ多クる神社ト。貝原氏ノ和爾雅ニ。遠賀郡
高倉村ト云フ。高倉神社ト云フ在リ。相殿神一座ト。天照大
神ニて神功皇后ノ祭ヲ給へる社ノと云フ。此ハ天照神
と云フ就テ。大御神ヲあらむと思ヒて。天照大神ト云フ免れ
ぞ。決キ免レて日大御神ヲ坐サさシ。火明命ヲあルべくおホ不也
まシむ。彼ハ天后ハ御世ニ。此ノ所ニて。鏡ヲ作ラせ給フ事ヲ
ど有テ。記ヲ給ヒらむと思ヒ合スるればハ也ト。和名抄ニ。席田
郡ニ賀美ニあド云フ郷名ハ。まシ式ニ。對馬ノ圀下ノ縣ニ。郡ニ。阿麻
るハ由ハ何ル事ヲあらむハ。

氏留神社ト何レ依ル社モ。決キ免レて火明命ヲあルはシ。故ニ是ヲみテ
命ノ御名ノ天照圀照ヲ。其ヲ上ニ舉ゲ之依。粒イハレニ坐シ天照神ヲ。筑前
を阿麻氏流ト訓ス。其ヲ上ニ舉ゲ之依。粒イハレニ坐シ天照神ヲ。筑前
圀ニあル天照神ヲ共ニ。火明命ヲあルはシく所思スる就テ思フ
ふ。此ハ假名ナ書ノ依ルのみ異レれども。唱ナの同シまシむハあり。
この阿麻氏留神社トもシくハ。顯宗天皇ハ御世ニ。日ノ神
月ノ神ノ御託ヲ坐シて。産靈神ヲ祭ス給へるトきハ。其事
を承賜ハまシる人ニ。對馬ノ圀ニ由リる人ニありしハ。其
其時ノ奉ル物ノ御鏡ヲ。彼ノ圀ニて作ラれどハ。爲ルむハ。因テ
祭ル形ヲあらむハ。知ルべシ。但シ。試シみテ云フのみあり。
あハ。此ハ。顯宗天皇ノ卷三年三月ノ処ニ。注ヲ見ルべシ。
凡テ天照ヲ號シ。負フ神社ノ信ヲ。日大御神ヲ坐シむハ。
必ズその大御名ヲ。社號ニ稱シ奉ルはシき理ヲ。依ルことハ古
實ヲ得ルらむ人ニ。自ラ辨ズべき物ト。凡テ名ヲ云フ不レ
禮ト。依ル事ハ諸

越ふ傲へることのみ思多ハ委のらび古も況て大
事の状も依りて其意む子の既く見とるを也。況て大
御神とどふ申さえて唯ふ天照神あど申さむとと甚
も可畏く。不禮とも不禮き言状ある事を。熟く思ひ辨へ
て。天照大御神あるはじき事を悟、祿うし。但し哥もたか
まとも有まど哥を調べを合さむと。○上、件ふ注せる。天
照と號ふ負坐依神くは。式あるも御紀あるも悉く火明
命あるはく所思るふ就て。因ふ此等の餘了。天照てふ言
此冠と依神の名此。御紀まと。他書ふも見とるを集
て。此辨へむと。此る世の神学者あど。此不辨と
る神ふ日、大御神あらぬが有こと。或む得知らえて。天照
の二字をどふ申せむ。大御神此御事を思ひ。御紀まと餘

書をも讀て。天照と号ふ負る神ふ。大御神からぬも坐こ
と字知まる輩を。何の神も申去べき等称あり。れど心
得とる類も多。其まお清和天皇紀。貞觀元年五月の處
ふ。山城、圀正六位上。天照御門、神授從五位上。異本も從五
位誤あり。其この全文も。山城、圀從五位下。大川原、圀津
神、有市、圀津神、正六位上。天照御門、神並授從五位上。とあ
りて。大川原、神と有市、圀津神と。當時從五位下。坐
し。一階を進めて。從五位上を授給ひ。天照御門、神ハ。當
時正六位上。坐し。從五位下を越階して。從五位
上を授給する由あり。並と有み。心字著て見るべし。と
見えぬる神の天照を。神と云まで係れる稱言ふを非也。
御門と云ふ係れぬ。その天照御門と。天照大御神の御
門。と云義と通ゆれぬ。天照御門之神。と記さるべきを。門
神と書べ。此漢文の格ふ。之字を省きて記し。まるとるあり。

其を櫛石窓。豐石窓神を。御門神と申せども。此を御名
ふハ非で。御門を守る神。といふ義あるをも思合はべし。
故古事記ふ。此神者御門之神也。と記す。かく有むふ。誰
も御名とは思ふまじきを。之字を死故ふ惑ハしきを
也。まじき物を。解むと云ふ。此を。心を得。ハ有
ど申せども。此を。名を。非。實の御名。久。能。智。神。草
野。比。賣。神。豐。宇。氣。毘。賣。神。み。て。此。神。と。ち。木。草。野。御。食。を。掌
看。之。字。を。加。へ。て。記。す。之。神。野。之。神。御。食。之。神。と。申。あ。ま。ま。正。し。く
ハ。之。字。を。加。へ。て。記。す。之。神。野。之。神。御。食。之。神。と。申。あ。ま。ま。正。し。く
如。く。記。す。之。神。野。之。神。御。食。之。神。と。申。あ。ま。ま。正。し。く
も。此。等。ふ。准。へ。て。悟。る。べ。し。此。餘。も。諸。書。ふ。見。と。る。神。名
ま。と。式。ふ。載。ら。ま。と。る。神。社。の。号。ふ。せ。悉。く。此。心。得。あ。く。て
を。得。有。ま。じ。き。物。を。依。を。某。神。社。と。有。れ。む。や。ぐ。て。其。を。打
任。せ。と。る。御。名。の。お。と。心。得。と。る。輩。も。ち。て。此。天。照。御。門。神
多。う。依。を。甚。漫。ある。に。さ。あ。り。し。

と云神。御門之神と申せ。疑なく天。石戸別命。あらむと
を。誰も思ふ。災れ。此は式。山城。因葛野。郡。天津石門
別稚姫神社。大。月。次。と。ある。神。ある。は。く。所。思。と。す。其。を。此
御社の事。清和天皇。紀貞觀七年六月の處。山城。因。從。五
位上。天津石門別稚姫神。列。於。官社。と。見。えて。此。年。始。終。て。
官社。小。定。給。ひ。て。神祇官の神社帳。よ。載。され。給。へ。る。あ
也。神祇官の神社帳の事を。徴。然。れ。バ。以。前。ふ。い。ま。ど。帳
第三條。委。く。注。を。見。え。ふ。載。され。給。え。ぬ。不。ど。也。當。時。世。常。ふ。申。し。習。は。む。稱。の。は
は。よ。天。照。御。門。神。と。申。て。往。昔。よ。正。六。位。上。を。授。給。ひ。此。位
奉。ら。れ。し。事。也。貞觀元年。ふ。從。五。位。上。を。授。奉。也。給。ひ。ら。む
御紀。漏。と。り。

ガ。同貞觀七年。官社と定免給ふ時。正タシく天津石戸別
稚姫神と載されむ。其を官社ヲ列ツラられ給へる時
も。既ハヤく從五位上ノて坐ませむ。是ト正ニ以前ノ。天津石
門別稚姫神と申て。位階を奉られと依事ルく。貞觀元
年ノ。天照御門神授テ從五位上ト有ル。と符シるを以て思
ひ辨ベシ。例を言ハば貞觀元年正月大和國天香山太麻等
野智神ニ從五位上ト御紀ニ見ユとモ式ニ然
る社ニ見ユざるを此ニ十市郡ノ天香山坐テ擲眞命神ニ社ト
見えル神ありル。其ニその分注ス元名太麻等ノ乃知
神ト有ル。知ラれル。其ニかクる例ニ去レれル。有ル。さて此
香山坐テ神ニ元名ト云ク。有ル。故ニ御紀ニ太麻等野智神ト
有ル。此ニ社ト云ク。知ル。を天石門別稚姫神ニも元
名天照御門神ニ記スべきを漏サせル物トこそおも
む。扱テその天津石門別稚姫神トいふ神ニ決メて萬幡

豐秋津比賣命ニあるレ。所オボ思フる由有テ。上ニ注シ。死ス。第四
段を披キ。まと貞觀三年十月の御紀ニ。備後國天照眞良
見ベシ。建雄神ノ授テ從五位下ト。一本建ト。と見ユる神ニ決メて天目
一箇命ト。亦ハ名明立。天御蔭命ト。あるレ。所オボ思フる。目ツ命御蔭命同神
段ノ委ク。其ニ上ニ見えル石屋戸段ノ御鏡を作スる
云キ。事を取リ。天金山之鐵ニ而求メ。鍛人天津麻羅ニ而科テ伊斯許理度
賣命ニ令ム作ラ鏡ト。有ル。鍊ニ麻賀祿ト訓ベシ。此時の御鏡ニ。
さて麻羅ニ師ノマウラト訓キ。天津麻羅ハ上ニ注ス
るニ。即チ天目一箇命ニ。此ニ御鏡を鐵ニ作ラれ故ニ伊
斯許理度賣命ノ作ラ給ヒ。其ニ鍛キふる下事ト。天

津麻羅^セ小爲^セし^セ久^セとる由あり。斯て伊斯許理度賣^セ命^セ 亦名、天香

山の御父也。此功小を^セて、天照^セ罔照^セと名小負^セ坐^セるを思

ふ。天津麻羅^セ命^セも。此時の功小依^セて、天照^セてふ稱號^セを負

ふ^セむ。と所思^セと^セ也。 心を平、みして、熟く思ひ辨ふべし。明

立天、御蔭、命と云名も、鏡小由ある名あるこ也、既^セみ 注るが如し。 ちて式小^セ備後^セ罔^セ小^セ此神名^セの社^セ何^セ也^セやと

見依^セみ。此も社名^セの改^セれる^セ。都^セて此^セからむ。と所思^セ也^セる

社^セさ^セ牙^セ小^セ見^セえ^セ交^セ然^セま^セむ漏^セさ^セま^セる^セ。 此例も、亦いと多

十一段、忌部、首の処 注ふを見るべし。 然^セ有^セれど。此^セ罔^セ小^セ三^セ上^セ郡^セ何^セゆ^セて。其

郡^セ小^セ三^セ上^セ多^セ可^セあ^セど云^セ郷^セ何^セ也^セ。此^セを近^セ江^セ罔^セ野^セ洲^セ郡^セの三^セ上^セ

郷^セ。ま^セと犬^セ上^セ郡^セの。田^セ可^セ郷^セを移^セせる地名^セある^セま^セと炳^セく^セ所

思^セま^セむ。由^セあ^セき^セふ非^セ也^セ。其^セを神名^セ式^セ小^セ野^セ洲^セ郡^セ。御^セ上^セ神^セ社^セ

と云^セを載^セされ^セて。此^セを天^セ御^セ影^セ命^セ 亦名、天、目 小^セ坐^セせ^セむ^セ也^セ。

此事、第三十九 段、委く注り。 ま^セと陽^セ成^セ天^セ皇^セ紀^セ元^セ慶^セ七^セ年^セ十^セ二^セ月^セの處^セ小^セ。

伯^セ耆^セ罔^セ正^セ六^セ位^セ上^セ。天^セ照^セ高^セ日^セ女^セ神^セ從^セ五^セ位^セ下^セと見^セとる^セ神^セも。

式^セ小^セを^セ見^セえ^セ給^セえ^セば。更^セ小^セ考^セふ^セべ^セき便^セも無^セを^セ。お^セら^セく^セ思

牙^セ也^セ。此^セを^セそ^セハ^セ日^セ大^セ御^セ神^セ小^セ坐^セ法^セく^セ所^セ思^セぬ^セゆ^セ。其^セを大^セ御^セ神

を。亦^セ天^セ照^セ大^セ日^セ靈^セ命^セと^セ申^セし^セ御^セ名^セと^セぬ^セぐ大^セと高^セとの違^セ

のみ^セあ^セま^セむ^セ也^セ。 大も高も、称言みて、然し 世異なる意をあらわし ま^セと神名^セ式^セ小^セ。

山^セ城^セ罔^セ久^セ世^セ郡^セ。水^セ度^セ神^セ社^セ三^セ座^セと見^セとる^セ社^セの祭^セ神^セを。山^セ城

風^セ土^セ記^セ小^セ。天^セ照^セ高^セ彌^セ牟^セ須^セ比^セ命^セ。和^セ多^セ都^セ彌^セ豐^セ王^セ比^セ賣^セ命^セと^セ何

依て。高彌牟須比命。天照を冠と依ふ非也。天照の下ふ
某命と。某神と。有るむ字の。脱あること疑ふ。然ら
ざれば。式ふ三座や有ふ合ざれど。前ふ。命。此。字。此。脱と
る。みて。天照高彌牟須比命。和多都弥命。豊王比賣命。と。三
柱。あらむ。と思ひし。うど。阿波。国。名。方。郡。よ。和多都美豊王
比賣。神社。や。い。ふ。見。え。餘。書。よ。も。和多都美豊王比賣命と
云。る。こと。あ。く。ら。見。と。ま。む。豊王の上。命。字。の。脱。と。る。よ
ハ。非。ざ。上。の。件。此。説。ど。も。を。熟。考。已。と。して。天照と號ふ負
ゆ。り。也。依神此。悉。ち。負。給。ふ。べき。由。有。て。負。坐。ある。よ。を。辨。へ。
ま。多。天照と負。る。神。名。よ。大御神。あら。ぬ。が。有。こ。と。も。知
也。は。と。誰。神。ふ。まれ。甚。く。尊。み。奉。也。申。ば。き。稱。の。ご。を
思。む。も。非。依。事。を。悟。る。也。凡。て。神。の。御。上。み。己。が。私
を。さ。し。挾。て。其。ふ。仕。奉。

る。人。あ。ど。の。強。て。も。其。神。を。他。神。と。り。も。立。勝。れ。る。神。云。
あ。さ。む。む。の。構。へ。其。ふ。於。け。て。其。神。子。對。へ。る。神。を。い。ひ。貶。
さ。む。と。は。る。類。も。あ。ま。ど。其。も。や。と。あ。き。忠。心。も。有。れ。
ど。い。や。／＼。畏。き。所。為。あり。し。其。社。に。神。主。と。ち。祝。
等。あ。ど。已。が。仕。奉。る。神。を。の。み。神。と。思。ふ。人。も。あ。り。し。祝。
ぞ。凡。て。已。の。私。の。神。社。と。て。を。無。こ。や。み。て。悉。朝。廷。の。神。社。
あ。る。を。神。主。等。祝。と。ち。の。某。く。み。預。也。ま。を。し。て。仕。奉。る。あ。
依。多。や。此。を。譬。へ。て。言。む。君。の。御。子。此。八。人。あ。り。て。其。子。
お。の。／＼。杖。を。代。人。を。附。て。育。ま。ぬ。む。各。々。そ。の。杖。代。
人。と。も。此。已。く。預。り。奉。る。御。子。此。勝。と。る。由。ま。と。兄。と。坐。
は。由。あ。ど。を。論。ひ。預。り。奉。る。御。子。此。勝。と。る。由。ま。と。兄。と。坐。
あ。ち。の。等。卑。賢。愚。を。其。父。君。の。定。み。こ。そ。有。べ。り。也。實。ハ。そ。
此。八。人。此。御。子。と。ち。共。み。其。八。人。此。杖。代。人。の。君。よ。て。其。持。
別。て。崇。養。く。あ。と。ハ。君。の。仰。ふ。を。り。て。姑。く。持。別。と。る。あ。れ。
む。彼。此。の。隔。を。更。よ。或。人。問。き。ら。く。皇。字。沙。汰。文。ふ。引。る。鳥。
あ。き。事。あ。る。を。や。羽。院。天。皇。此。天。仁。二。年。と。天。永。二。年。と。兩。度。の。宣。命。よ。外。宮。
此。度。相。ふ。坐。に。神。を。天。照。坐。須。豊。受。皇。大。神。と。宣。する。事。の。

也。此をいふ。答。此大御神。天照坐須。と稱すべき謂を
けま。正しき古書共ふ。更ふ例なき事あるを。謂也五部書
の類其餘も。此大神を天御中主神。因常立神。同神ある
由。偽記せる書等。見とる事。今云々。ぎり。非
宣命調上。依博士。とちの心得。ひら。絶とる誤。依を。何
のし。非を。もらし。給。予。る。依。べき。あ。と。決。れ。し。其。を
上。件。ふ。舉。ゑ。る。神。名。ども。を。見。と。唯。天。照。を。有。れ。ど。坐
須。て。ふ。言。の。有。ら。彼。を。悉。た。り。負。給。ふ。べき。謂。何。て。負
坐。依。なき。ど。其。功。徳。ふ。因。て。稱。美。辭。ふ。冠。と。る。も。此。故。よ。坐
て。ふ。言。を。加。さ。る。字。や。挂。ま。く。も。可。畏。也。御。事。を。の。ら。天。照
坐。須。と。申。ひ。言。を。實。事。よ。係。り。て。唯。此。稱。美。辭。の。類。ふ。非。非。

む。伊須受能宮。鎮座。坐。大御神。限。て。申。奉。る。言。ふ
こそ。有。れ。他。神。と。ち。假。令。い。う。も。尊。き。御。謂。此。坐。ま。は。とも。
如此。申。し。奉。ら。む。事。を。實。事。ふ。何。と。ら。ざ。る。故。よ。却。て。其。神
を。誣。奉。る。わざ。あり。かし。其。を。内。宮。ふ。齋。祀。て。奉。る。を。天。津
日。大。御。神。み。大。坐。ま。し。其。現。御。身。ハ。高。天。原。み。神。留。坐。て。お
布。其。大。御。靈。を。内。宮。と。天。宮。と。ふ。御。往。來。坐。し。此を上も
抄。寿。永。二。年。六。月。の。下。み。祭。主。親。俊。奏。法。皇。云。夢。想。云。參。神
宮。平。伏。庭。上。父。親。定。并。親。章。在。堂。上。以。親。定。專。仰。云。於。我。者
令。向。天。宮。給。畢。法。皇。御。事。所。令。申。付。荒。祭。宮。給。也。云。く。と。見
え。こ。る。を。熟。思。ひ。て。其。大。御。靈。の。天。宮。み。御。往。來。ひ。坐。こ。せ
を。悟。る。べ。し。さ。て。親。定。并。親。章。と。の。下。み。兩。人。過。去。者。と
い。へ。依。本。注。あり。然。れ。む。此。を。身。亡。て。後。み。大。宮。み。參。り
仕。奉。ら。れ。し。あ。正。此。よ。就。て。思。ふ。神。の。宮。人。と。ち。の。と。く
其。宮。み。仕。奉。ま。る。人。の。魂。此。行。方。此。明。り。み。知。れ。て。いと

頼もしく、羨ま
しき事コトノもあむ。今日イマ此コノ所トコロにあり。天地の間を御照し坐まは
事實コトノを以て。天照坐須と申マツルあまを渡ワタい。うハ尊ミコトく坐イマまはし
も。他神ヒタカミの御上ミコトノに申マツルさむことせむ。誣奉ウソマツルる言コトも非ヒ安ヤスや。豊受トヨウケ
皇大御神スメラミコトハしも。然シカ依ヨ誣ウソする稱美辭タカハシゴトを申マツルて。稱奉タカハシマツルらざら
むも。其尊ミコトさ此コノ比ヒまタし坐イマさぬ事コトを。然シカむのり尊ミコトく坐イマまはし。
天照坐須大御神アメノミコトの御手ミテ自カラおの大神オホミコトに奉マツルじ給タマハふ神衣カミを
織オリじ坐イマし。御自ミコトノのら。新嘗奉ニギハヤヒマツルじ給タマハひしおど。都ミヤコて神カミを祭マツル
事コトを。大御神オホミコトの豊受トヨウケ大神オホミコトを祭マツルじ給タマハへるをり起タれる由ユを。
上ウヘ第四十ヨシ段ダン。み委マツルく注ツクせる如ごとくあまむ。相あ當あららぎを依ヨ稱美言タカハシゴト
を冠カへて。尊ミコトみ奉マツルるおどを。中ナカくハ心ココロ憂ウレき事コトぞのし。

爾科天麻比止都命ニニオホセアメノマヒツノミコトニ 亦名天津マタミナハアミツ

名明立天ミナハアカリタツアメノ 而令作雜刀斧及鐵テシメツクラクサクノタチヲノマタサナ

御蔭命ミカゲノミコト 而令作雜刀斧及鐵テシメツクラクサクノタチヲノマタサナ

鐸矣故是天目一箇命者筑紫ギラクキカレコノアメノマロトツノミコトハツクシ

伊勢兩國忌部倭鍛冶等出祖イセフタクニノイミベヤマトカヌチラガオヤ

也ナリ

天麻比止都命上。第三十九段。御名の出たる處。委く云

る如く。天津日子根命。此御子。お坐て。鍛冶カマヤの事を始メたる

神カミ也。亦名天津麻羅命。亦名明立天御蔭命。名義ナノミ也。上三

九段四。出イたり。○雜刀雑刀。此を下シ見ゆる。手置帆負命。日

子狭智命。此新宮を作る。お用ふ。雜刀物雑刀物。お依べし。おほ思

ること。有をそ。第七十九段。須佐之男命の。天照大御神。村雲。劔を献ヲ。とまふ。処トコロお注べし。○斧ノハ。和

名抄ノ。斧ノ和名乎能。一云與岐ヨキ。和名乎ノ。とあリ。さて此物

を作スる。新ニ瑞御殿ミツノミアラを造る。料タの木を伐る。料タをシ。○

鐵鐸テツ也。佐那岐サナギと訓べし。即本書ヨ。古語。實ニを鐸テツ。字やぐて

佐那岐サナギおまシ。此を鐵テツ以て作れ。依事を知らせむ。とて。鐵

鐸とを書る。お依べし。けて此物を作スる。天。宇受賣命

の伴ワザ優ヲひる。お持テべき。亦ナお著る。料タお。儀式帳ニ。新宮造ニ奉

時。行事ニ。并用物ニ。事條ニ。山口。神祭用物の中ニ。鐵人形四十

口。鏡四十面。鉾四十柄。木。本祭用物中。鐵人形四十口。鐵

鏡四十面。鐵鉾四十柄。地鎮謝用物の中ニ。鐵人形四十口。

鏡四十面。鉾四十柄。と見え。明應六年。同宮假殿遷宮記ニ。

鎮地祭物ト。鐵鏡肆拾枚。同人像肆拾枚。鉾肆拾枚。後鎮祭

物ト。鐵人像肆拾枚。同鏡肆拾枚。同鉾肆拾枚。御船代祭物

。鐵人像肆拾枚。同鏡肆拾枚。同鉾肆拾枚。とシ。古ハ鐵

を主トと爲シ。是等ニおても知べし。字書ニ。鐵ト鐵ト。お同じとあり。

○門人。岩崎長世。馬島穀生。北原信允等いふ。これの古史傳の九卷コノマキ小何コノマキとる卷を百志ヒトシぬ美濃山。杞キきる山也。大峽小峽コノマキにヒ立テ依テ。花ハぐはしシ佐久良サクの木キ字ジ。忌イミ斧ノもテ打ウきキて。本末ホンマツをば山ノの神ノ小コまマ抄セウ也。其中ナカニ此コノ間ノをテ持テ出デ來リて。加カくク指サシ形ノ木ノ小コ成ニしシ抄セウるル也。中津川ナカツカハの驛ノ長ノ市岡シウカウ殷政インセイと。同じ驛ノの事ノとスル。肥田ヒイデン通光ツウカウと二人ニもモあハむ。



